演藝通信

昭和六年
五月号

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和六年四月三十日印刷（毎月一日
昭和六年五月一日發行（一回發行）

登録商標

銘酒

醸造元

本高田商店

大阪支店　南區末吉橋通四丁目
電話船場六六壹番

本店　神戸市御幸通七丁目（電話兵庫自三四〇番至三四三番）
東京支店　東京市京橋區南新川（電話京橋一六五五番六〇七五番）
横濱支店　横濱市中區花咲町六丁目（電話長者町三三〇六番）
醸造場　神戸市灘大石（電話兵庫五〇四番御影五〇一番）

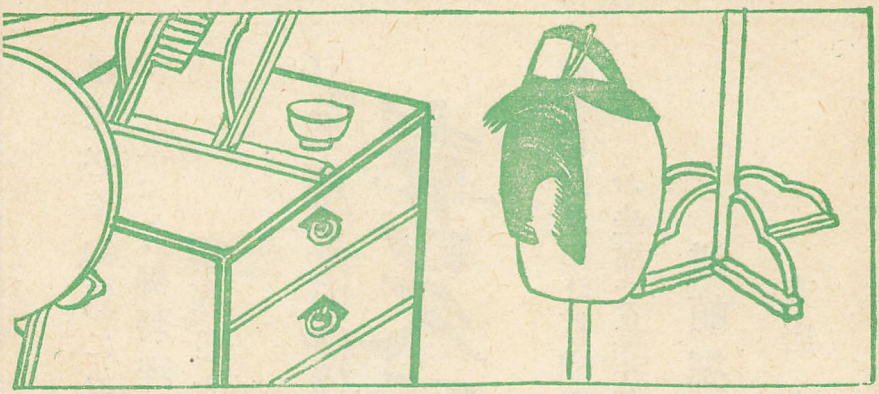
風味必ず御氣に召す
天ぷら御料理
季節日本御料理

芝居情緒と食道楽
喜久屋食堂

御芝居歸りには打揃ふて
お坐席で是非御會食を！

道頓堀戎ばし北詰

支店
大阪支店　北新地裏町
京都支店　木屋町ドングリ橋



道頓堀

昭和六年五月號　第六年第五十六輯

口繪

◆中座東西合同大歌舞伎◇「伊賀越道中双六」鴈治郎の吳服屋重兵衛・仁左衛門の雲助平作◇「新薄雪物語」扇雀の薄雪姫・魁車の梅の方・延若の園部兵衛・中車の幸崎伊賀守◇「平清盛」中車の平清盛・延若の入道西光◇「新薄雪物語」壽三郎の秋月大膳・延若の園部兵衛・長三郎の園部左衛門・鴈治郎の葛城民部之亟・大吉の來國行・成三の近侍・中車の幸崎伊賀守・鴈正の清水寺使僧壽坊・宗十郎の幸崎奥方萩之方・扇雀の息女薄雪姫・桂枝の近侍・福六の同宿・壽三郎の大膳・我當の奴妻平・市藏の五郎兵衛正宗・宗十郎の來國俊◇「杜若戀在原」魁車の原八ッ橋◇「神風樂諷雲井曲毬」長三郎の太皷打蝶之助・舞臺面◆角座河合喜多村合同劇◇「假名屋小梅」喜多村の宇治一重・河合の小梅◆眞景累ケ淵」河合の茶屋女房お清・喜多村の富本師匠豐志賀◇「有憂華」東の藤野光枝・石河の安富綾子◇「母三人」都築の先生・藤村の葛原清三郎・木下の妻眞砂子◆浪花座淡海劇◇「兵隊ローマンス」太郎のすしや清吉・樂太の伴三造・登喜次の煙草屋娘お絹・淡海の鰻屋の倅新一◇「穴」辨慶の阪本淡海の飯田◆文樂座人形淨瑠璃◇「菅原傳授手習鑑」加茂堤の段・文之助の時世の君・紋太郎の苅屋姫・扇太郎の八重・紋十郎の櫻丸・杖折の段・小兵吉の六田の前文五郎の伯壽・紋太郎の苅屋姫・相亟名殘の段・文五郎の伯母壽・榮三の菅相亟・車場の段・玉松の梅王丸榮三の松王丸・紋十郎の櫻丸・寺子屋の段・玉次郎の源藏・文五郎の千代・戀飛脚大和住來玉次郎の孫右衛門・紋十郎の梅川◆京南座東京新劇大合同◇「第七天國」早川のシコオ・菊枝のディアン◇「有憂華」及川の光枝・川田の綾子

◇表紙……（伊賀越道中双六古版畫）……

◇思出の沼津……高安吸江（二）

◇『新薄雪』追慕……高原慶三（一六）

◆『新薄雪』の思出……中村鴈治郎（四）

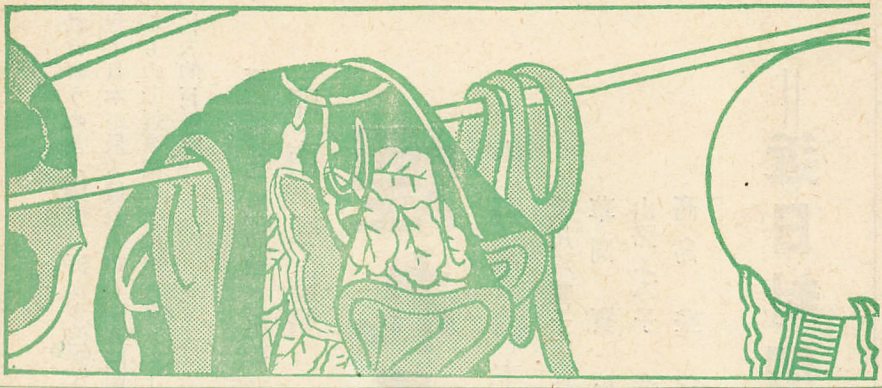
◆『沼津』に就いて……片岡仁左衛門（五）

◇新薄雪の考證……森ほのほ（六）

◇『新薄雪物語』の思出……倉田啓明（一三）

◇新薄雪物語雜記……高谷伸（一一）

◆新薄雪物語について……實川延若（一一）



◆思ひ出すまゝに……林長三郎（一〇）
◆私の役々について……市川松莚（一二）
◆中座出演に際して……澤村宗十郎（一七）
◆何を言はんとするのか？……片岡我當（二五）
◆平清盛に就て……市川中車（一五）
（順序不同）

誌上舞臺

新薄雪物語……（四幕）中座東西合同大歌伎……（一三）
平清盛……（一幕）同……（一八）
母三人……（四幕）角座河合喜多村顔合せ興行……（二六）
第七天國……（四幕）南座東京新劇大合同……（三六）

舞踊臺本　杜若戀在原……食滿南北（二一）
◇五月狂言に關しての愚感……志賀廼家淡海（二二）
◆大阪のお客樣へ……河合武雄（二四）
◆『眞景累ケ淵』に就いて……喜多村緑郎（二九）
◇光榮の文樂座……（三〇）
◆歸つて來た筒井……鳥江銕也（三二）

誌上封切

街の浮浪者……浦田作品……（四〇）
振袖源太……下加茂作品……（四二）

◆喫煙室……（四四）
◆劇壇往來……（四六）
◇扉及び挿繪……田中滿彦
◇編輯後記……

社會のうめきと戀愛の涯なき氾濫と舊日本的道義の頽廢と——現下日本が最大最急のあらゆる問題に最后の解答を與へんとするもので近來稀な復雜雄大なスケールを持つ帝キネ現代劇部の代表的巨彈篇。

原作脚色 上島量・撮影 二宮義曉
印南 弘 監督

煙れる太陽

中野英治主演

歌川八重子　桂　珠子
草間　實　生方一平
山路ふみ子　若葉　馨
高島　登　高津慶子

外現代劇部
總出演

＝近日封切＝

帝キネ提供

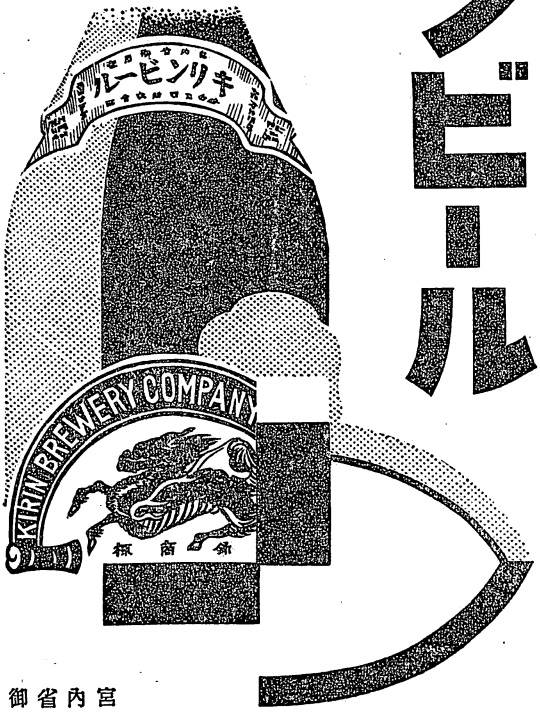
キリンビール

最古の歴史
最新の設備
最上の品質

清涼飲料

キリンレモン

絶對着色なし



宮内省御用達
麒麟麥酒株式會社

K3

歡樂境の中心

◆御買上品に對しては新舊市内御届致舛

呉服雜貨

◆御觀劇の御歸りに是非御立寄りを

セル・夏物新柄宣傳販賣開催中

丸玉 石川

大阪道頓堀

清楚な淡化粧に

新御園水白粉

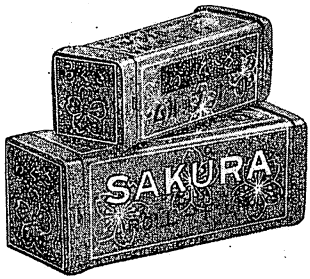
純白・肌色・櫻色

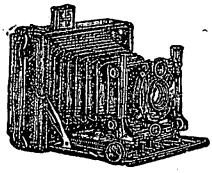
各五十錢

東京胡蝶園　伊藤本舗

輸入品に比し優るとも
毫も劣らぬ國産品

リリーカメラ
パールカメラ
アイデアカメラ
パーレットカメラ
さくら
ロールフヰルム
各判完成
（カタログ進呈）



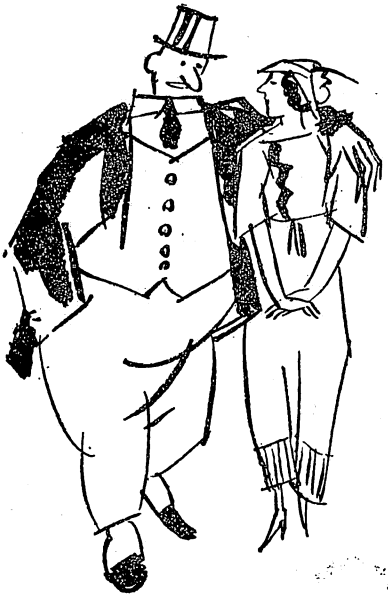


カメラは優良國産品を！

寫眞機及小型活動寫眞機

小西六大阪支店

大阪市長堀橋筋壹丁目



【中座五月興行東西合同大歌舞伎】

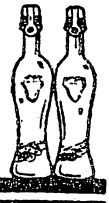
里の津沼 ⌊六双中道越賀伊⌋ 幕中

作平助雲の門衛左仁岡片 • 衛兵重屋服吳の郎治鴈村中

【中座五月興行東西合同大歌舞伎】

一番目
「新薄雪物語」
中村扇雀の薄雪姫

中村魁車の奥方梅の方・實川延若の園部兵衛・市川中車の幸崎伊賀守



プッロシシイルマ

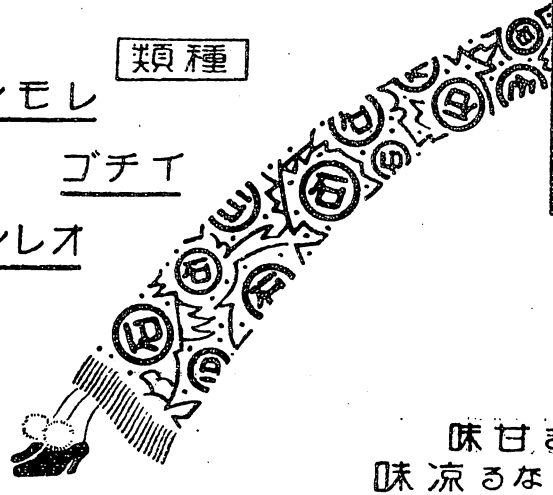
るホと杯十が杯一
素の料飲涼清

類種

ンモレ

ゴチイ

ヂンレオ



味甘るセ越卓
味涼るな快爽

目ラ二町路淡医東市阪大
社会居合薬製石丸
八一六四　七六三一　局本電

眼鏡印
肝油

清涼飲料
ンロトシンボリ
ビヤ
ルー
ASAHI BEER
ASAHI
LAGER BEER
大日本麦酒株式會社

大野醫學博士
實驗推奬
乳兒に一番良い
パームルイ
松竹石鹸

「ギブス」固煉齒磨

本品を使用すれば、幼時より老年に至るまで齒牙を完全に保つ事が出來ます。

何故なれば、**ギブス**煉齒磨は刷子がとどかぬ微細な間隙へ侵入して常に齒を美しく清潔に齒を保つ事は取りも直さず身體の健康を計るのでありますから毎日二回必ず**ギブス**煉齒磨を御用ひ遊ばせ、さすれば氣分は爽快になられます

本品は美しきアルミニューム罐入りで桃色の固煉製であります、有名な百貨店藥店及化粧品店に賣つて居ります。

大形　壹個　金七拾錢
小形　壹個　金四拾五錢　大形中味　壹個　金六拾錢

ロンドン　パリス
デイ・エンド・ダブリユー

日本代理店　株式會社　横山商店　東區豐後町三番地

ギブス株式會社

株式會社

攝津貯蓄銀行

大阪市西區北堀江御池町四ノ一六

電話新町一五五・六九一・二二五

【中座五月興行東西合同大歌舞伎】

（上）中　幕「平　清　盛」　市川中車の平相國入道清盛　實川延若の左衛門入道西光

（下）一番目「新薄雪物語」舞臺面のいろ〳〵

←片岡我當の奴妻平　中村宗十郎の浪國俊　阪東壽三郎の秋月大膳

市川市藏の五郎兵衛正宗
市川松蓮の娘おれん
實川延若の倅圓九郎

（左上）阪東壽三郎の秋月大膳　實川延若の刀鍛冶圓九郎
（左下）中村扇雀の薄雪姫　林長三郎の園部左衛門
嵐吉三郎の待女蘿

【中座五月興行東西合同大歌舞伎】

一番目「新薄雪物語」幸崎邸の詮議の場

阪東壽三郎の秋月大膳
實川延若の園部兵衛
林長三郎の園部左衛門

阪東壽三郎の秋月大膳
片岡我當の奴妻平

中村鴈治郎の葛城民部之亟
淺尾大吉の來　國　行
中村成三の近　侍
市川中車の幸崎伊賀守
實川鴈正の清水寺使僧覺坊
澤村宗十郎の幸崎奥方萩の方
中村扇雀の息女薄雪姫
中村桂枝の近　侍
中村福六の同　宿

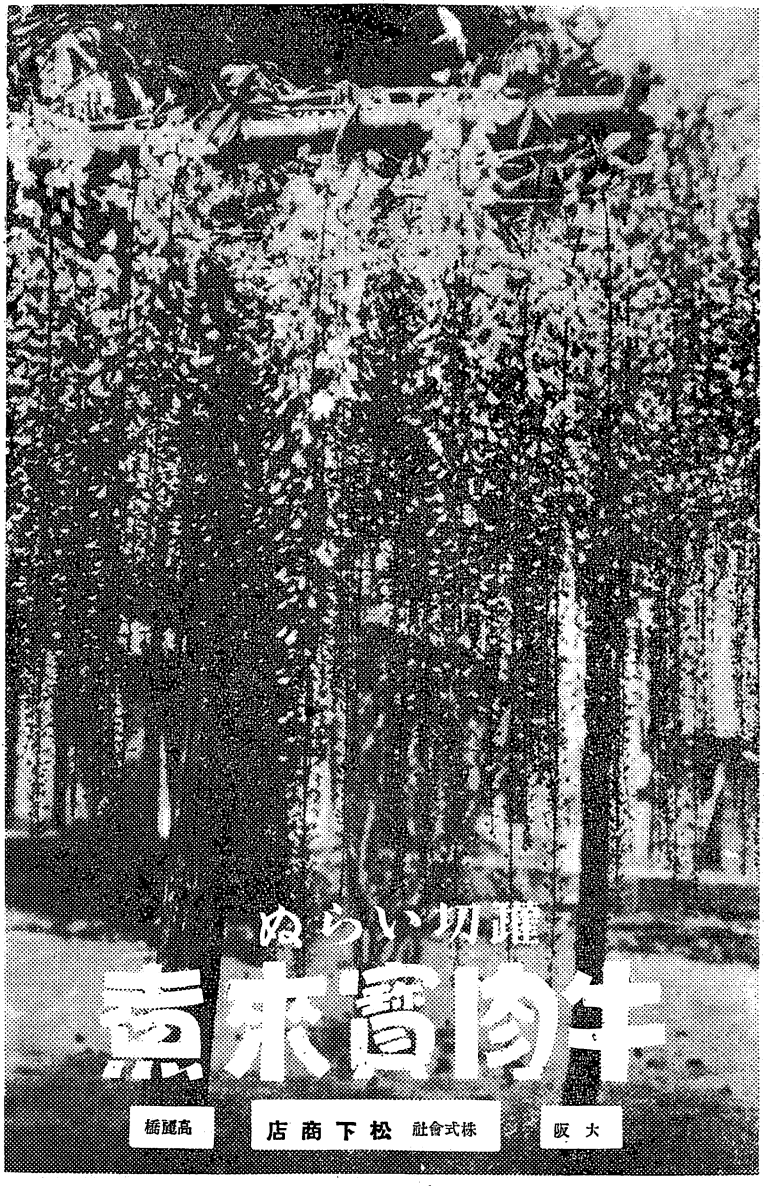
市川市藏の五郎兵衞正宗
澤村宗十郎の來　國　俊

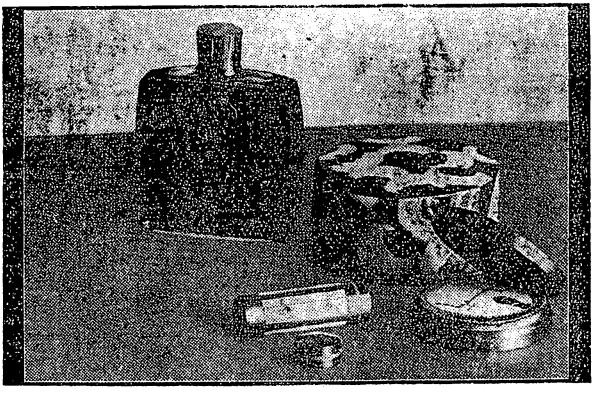
【中座五月興行東西合同大歌舞伎】

大喜利の卷上「杜若戀在原」
中村魁車の長の娘八ッ橋

大喜利・下の卷
「神樂諷雲井曲毬」
林長三郎の太鼓打蝶之助

「神樂諷雲井曲毬」舞臺面
片岡我當の頭千代吉
中村魁車の丸一榮太夫
林長三郎の太鼓打蝶之助
澤村宗十郎の太神樂どん八
中村扇雀の白酒屋好松
中村成太郎の太鼓持梅作


ぬらい切離
高麗橋
店商下松 社會式株
大阪



LES PARFUMS DE COTY

香化粧水品

粉白粉 —— ¥1.15
コムパクト —— ¥1.35

PARIS FRANCE

コティー

全國著名遊覽地御案内

御料理旅館

むさし亞

奈良三笠山麓

電話七二〇〇番
七三〇〇番

大垣公園城畔高台

本店 吉岡樓

有大廣間常設舞台各種宴會好適、市街一望ノ佳所ヲ占ム

電話一〇八二七九番

支店 千歳樓

養老公園眺望最絶中央高台

電話一八二〇七番

別館 流芳閣

全 感亭

最モ光榮アル歴史ヲ有シ、優越春月四季眺望絶佳・諸官廳指定・高級旅館トシテ諸設備完全

理想ノ避寒好適地

相州湯河原温泉

伊豆屋旅館

電話湯河原長一二番

全 別館

電話一二三番

地震には絶對安全

關西線笠置驛ヨリ三丁

御料理旅館 笠置館

笠置溫泉

京都府笠置(木津川畔)

電話長六五番

東海道に尤も近き山の溫泉

別天地

伊豆新古奈溫泉

見晴山の大湯

松仙閣 白石館

電話伊豆長岡二九番

三島驛、沼津驛より自動車、電車にても卅分 地震の絶對安全地帶

本欄ノ廣告ハ左記へ御申込下サイ

『道頓掘』廣告取扱所

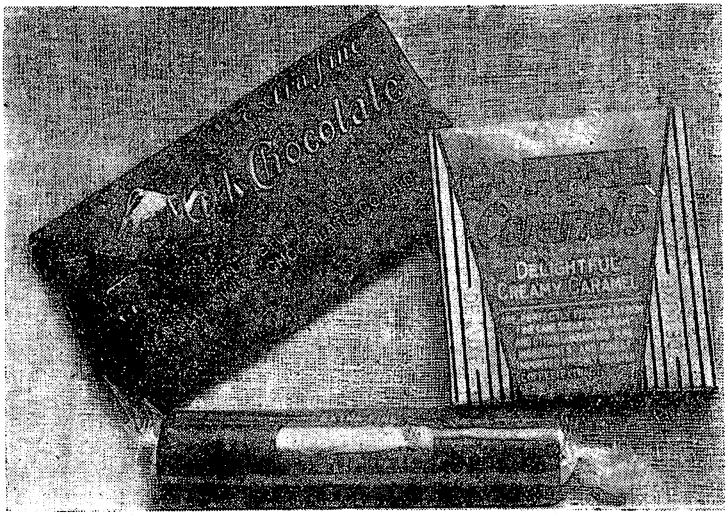
劇場廣告社 中江三省

大阪市住吉區阪南町東三

東京市赤坂區靈南坂町八

アングロス井ス
ミルクチヨコレート
コーヒキャラメル
チヨコレート キャラメル

大阪市東區豐後町三番地
發賣元 株式會社 横山商店
電話東(94)一六六一二〇一三番



小道具
小裂

貸衣裳

・素人演藝會・宴會の催物・
・春秋溫習會・婚禮の衣裳・

松竹衣裳部

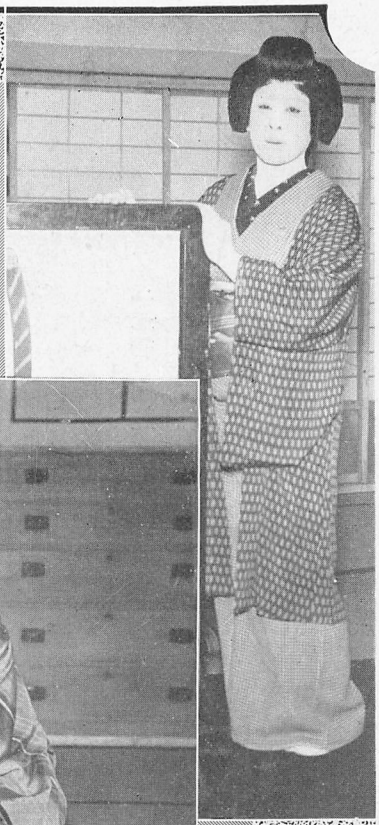
本　店　大阪市浪速區南坂町松竹ビル內
電話戎五六三四番
東京支店　東京市淺草區並木町十五
電話淺草五五九九番

（其他一般の衣裳多少に不拘御利用下さい。
御來客の御相談に應じ便利よく取計ひます）

【五月の角座】

せ合顔のり振年十村多喜・合河

「梅小屋名假」



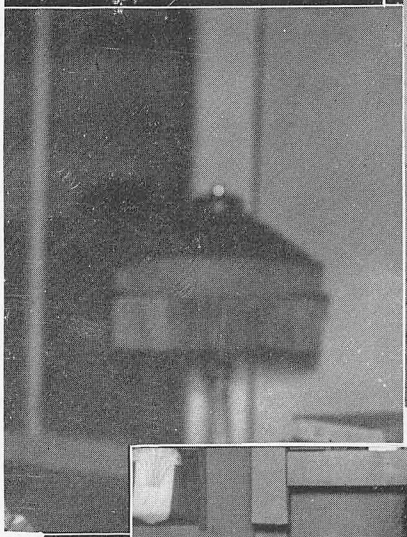
喜多村綠郎の宇治一重

河合武雄の假名屋小梅
喜多村綠郎の宇治一重

河合武雄の假名屋小梅

【五月の角座】

河合・喜多村十年振りの顔合せ



「眞景累ケ淵」

河合武雄の茶屋の女房お清
喜多村綠郎の富本師匠豐志賀

「母三人」

都築文男の學校の先生
藤村秀夫の葛原清三郎
木下吉之助の妻眞砂子

「有憂華」

東愛子の藤野光枝
石河薫の安富綾子

【五月の浪花座】

久々の　淡海劇

（上右）「兵隊ローマンス」

太郎のすしや清吉
樂太のその伴三造
登喜次の煙草屋娘お絹
淡海の鰻屋おぶん
の伴新一

（右下）「兵隊ローマンス」

樂太の三造
淡海の新一

（中）「穴」

辨慶の親友坂本
淡海の飯田吉雄

便所の防臭に困る方は今直ぐ

製創氏郎太彪林　士學藥

印パタフ
脱臭劑
アポロ
是非御使用あれ

家庭必備品

使用簡潔
十滴奏効
無害無毒

「アポロ」ハ一つの便所に大抵十滴撒布すれば充分奏効します。

「アポロ」ハ溶かすことがいりません、このまゝ撒布すれば宜敷いから少しも面倒でありません。

「アポロ」ハ他の藥（カンプラ油、デシン、ナフタリン、クレゾール、樟腦など）と異ひ化學的變化により放臭物を無臭とします。

「アポロ」ハ毒性がなく無害で便所にアポロの臭ひが殘らぬ爲め汲取人がイヤがりません。無論農作物にも無害です。

「アポロ」ハ使用法が輕便で奏効的確、用量が僅かですから經濟にもなります。

△使用法　一回十滴乃至十數滴づゝ（場所により多少の加減を要す）一回多量に撒布するは却て効力を減ずる事あり使用後は栓を堅くし冷所に置かるべし。

（定價一瓶小金五拾錢　大金壹圓）

到る處の藥店
各百貨店に販賣す

發賣元
大阪市東區伏見町三丁目
光榮商會
電話本局三三一五番
振替大阪三三一一七番

新聞
廣告は電通へ
大阪市北區中之島二丁目
新聞通信及廣告代理業
大阪電報通信社
電話 本局 五五九六 九一一九 九四三一 六〇〇四 二〇〇五 三九二〇 寫眞部 〇〇六〇 製版所 〇〇二〇三
本社 東京 日本電報通信社
主ナル支局
名古屋 金沢 下關 釜山 北京 南京
函館 京都 長崎 京城 天津 紐育
札幌 神戸 奉天 青島 巴里
横浜 青森 岡山 大阪 倫敦
仙臺 廣島 鹿兒島 哈爾濱 上海 桑港
臺灣 長崎 松山 大分 廣東 羅府

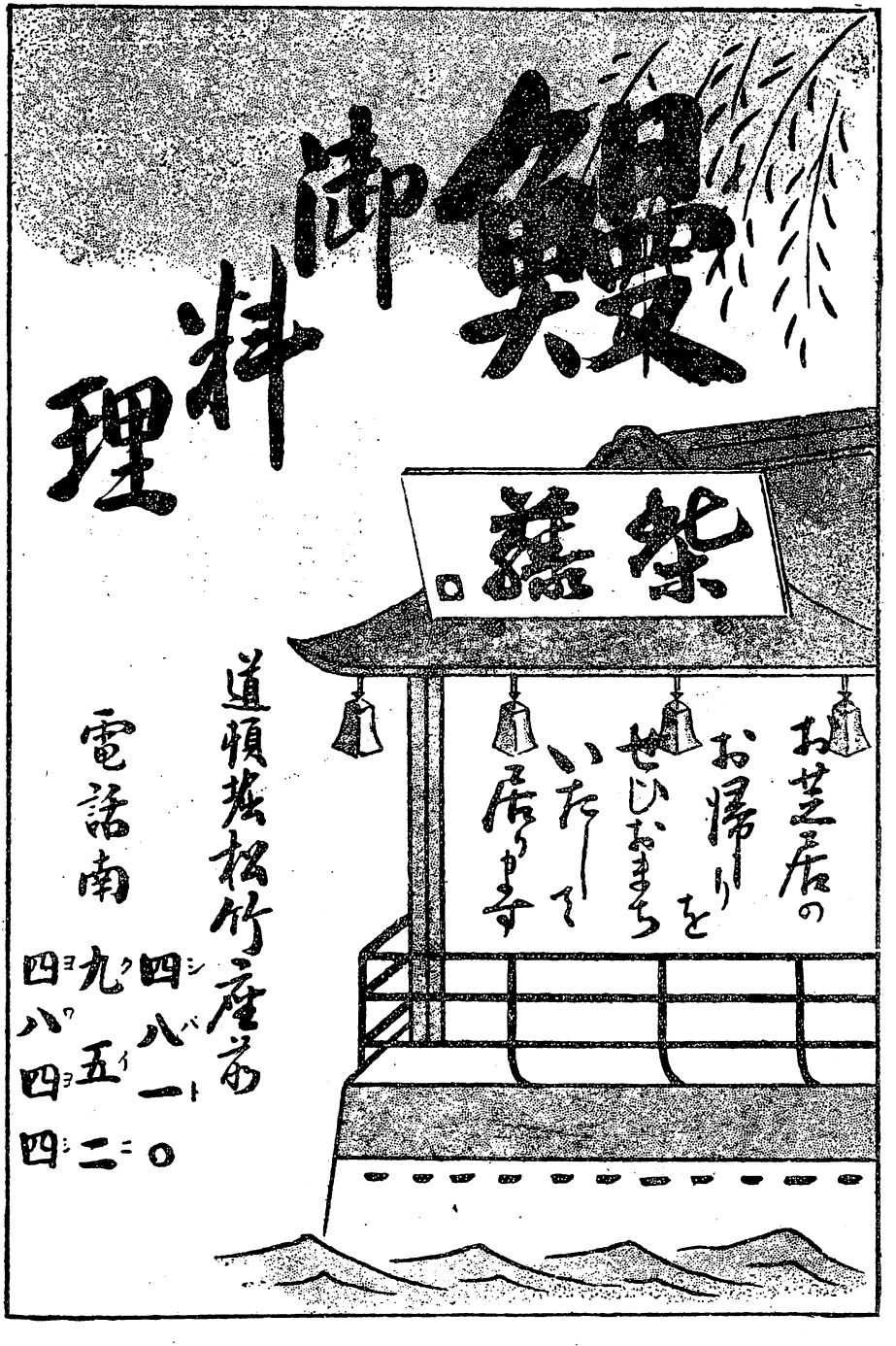
最新式製法の

鹸石ブラク

クラブ石鹸で
洗ひ流した快
よさ爽やかさ
潑剌たる活動
の意氣はここ
から生れます

最良のケフとり香水

ネーニキブラク


鰻
料理
御
楽
お芝居の
お帰りを
せいぜいおまちを
いたして
居ります
道頓堀松竹座前
電話南
四八一〇
九五二
四八四四

【文樂座の五月】

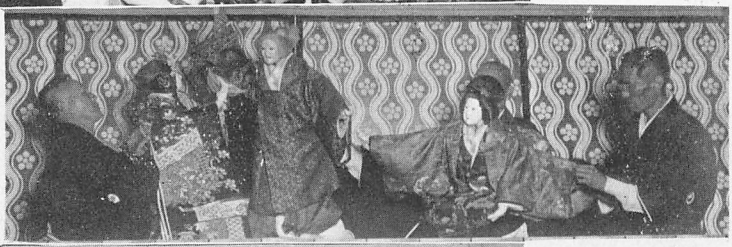
「菅原傳授手習鑑」

加茂堤の段

時世の君　文之助
苅屋姫　紋太郎
八重　扇太郎
櫻丸　紋十郎

杖折檻の段

立田の前　小兵吉
伯覺壽　文五郎
苅屋姫　紋太郎



相丞名殘の段

伯丹覺壽　文五郎
菅相丞　榮三

車場の段

梅王丸　玉松
松王丸　榮三
櫻丸　紋十郎

寺子屋の段

源藏　玉次郎
千代　文五郎

「戀飛脚大和往來」新口村の段

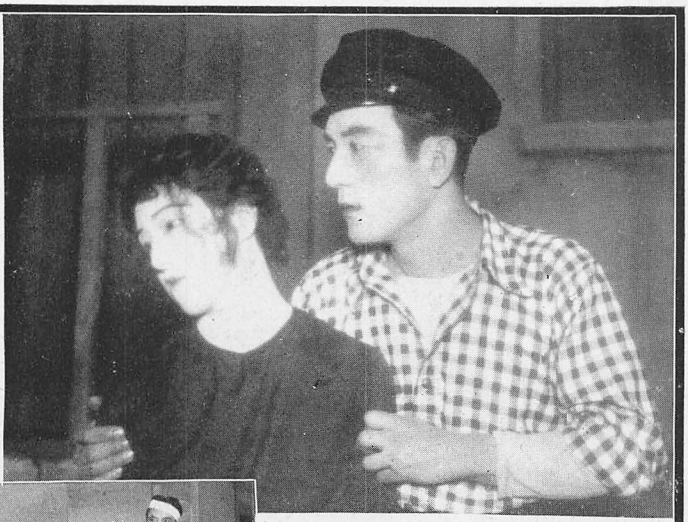
孫右衛門　玉次郎
梅川　紋十郎

【都京 南座五月興行】

「第七天國」

（上）早川雪洲のシコオ
尾上菊枝のディアン

（中）第四幕　シコオの部屋



「有憂華」

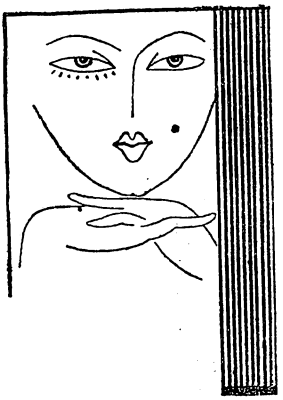
及川道子の光枝
川田芳子の綾子

化粧作用百二十パーセント

スキナあぶら取紙

御愛用の程！

發賣元 大阪 朝日堂株式會社
本舗 大阪 中田スキナ屋



製社會ーミラセ・ーリパ國佛
品粧化ーピツカ料粧化秀優的界世

料粧化ーピツカ

ンロコデオ•ンヨシーローヤヘ•水香
(色各)粉白粉•水香トツレイト
(色各)紅頰•(色各)トクパンコ
鹼石粧化•鹼石りそ髭•(色各)紅口
油香•ーダウパークルタ•洗髮
ムーリク•油練•ンチンラリプ水
切一他其•品粧化•箱合取用物進

カツピー香水

カツピー化粧料
ホスター化粧料
オワランド化粧料
ジョリスワ化粧料
輸入元
大阪 大浦彌商店

サンデー毎日連載

長谷川伸氏原作

馬頭の銭

林長二郎 主演

松竹キネマ株式會社

大阪市東成區鶴橋南之町一丁目

桃谷印刷株式會社

電話天王寺(77)二六七〇番
二六七一番

月刊·演劇研究·雜誌

演藝編

第六年

五月號

第五十六輯

思出の沼津

高安吸江

明治廿九年十一月浪花座の忠臣蔵で縺れ出した感情の蟠りが解けなかつたこと三十年、終に大正十二年震災後の十一月頭はりの忠臣蔵で仲直、沼津の顔合せに人氣彌が上に高く、三つ揃うた敵討、忠臣蔵に伊賀越、今一つは大切の所作勢獅子の中に曾我物語を踊りますと鳳治郎の大滿悦も一ト昔で、こゝに再度の鳳仁合同の沼津は見ぬ前から結構と先づ大入の御慶を申しておきましやう。

寛永十一甲戌年十一月七日辰の上刻（午前八時）長田川の假橋を渡つて伊賀の上野の町外れ鎧屋の辻へかゝる一行、問題の河合又五郎を中央に十一人の同勢、先登の大阪町人虎屋九左衞門は前夜嶋河原の宿で落合た又五郎の妹聟ですが、茶店萬屋の前で切て出た荒木渡邊等の勢に仰天し、馬も人も跳り上つてひた走に一里餘西大寺まで逃出して掠傷一ッ負はなかつたとの事です。

奈河龜助の伊賀越乘掛合羽（安永五年十二月）で呉服屋十兵衞としたのは此虎屋に當るのでしやう。こゝでは九州相良の生で出入先の野守元助が巡見の役で九州へ下る其案内を命せられたと云つて十一段の櫻田旅館と敵討に顔を出すだけですが、半二の道中雙六（天明三年四月）になると大分役がよくなり、敵討へ出る代に九ッ目伏見の船宿で、志津馬、孫八が櫻田林左衞門を追て行くのをかけ隔てゝ終に志津馬に肥先ズッパリ切下けられ「町人なれ共敵の端くれ、股五郎に賴まれた一ッの命を兩方への使ひわけ」と敵一味の落行先を敎えて、妹瀨川の行末を賴みます。

元來此男は股五郎の從兄弟城五郎が出入先で、商人冥加、多年の恩報じにと、毎年下る九州相良の案内を承諾するので、股五郎が一命を賴む印にと南蠻傳來の妙藥を其印籠に入れて預けますのが、後の沼津の段の骨子になるのです。

沼津は此作の主要人物、唐木をはじめ渡邊、澤井などを一切出さず然かもよくまとまつて居る一幕だけに却て面白く見られ

又例の義理づくめかと思ひながらもツイ釣り込まれて見てしまふ處に此場の妙があるのでしやう。

原作では十兵衛であるのに何故か重兵衛となつて居ます。呉服屋重兵衛。私はいつも藤井重兵衛の本名で呉服屋を營んだ名優中村宗十郎を追憶し、ひいてはその薫陶をうけた鴈治郎を想起すのであります。斷ておきますが私は故人末廣家が實際此役を演じたかどうか知りませんが、そうした連想が起る程に鴈治郎の重兵衛は、彼の當藝の一ッとして推奬せらるべきものでありました。

文樂で御覽の方は御承知でしやうが、義太夫では重兵衛が親子と悟るのが早いので、すべての行爲に其腹がついてまはり、「町人でこそあれ心は金鐵」の堅さがどこまでも失はれずに居りますが、芝居ではお米が濃艶な姿に魅惑せられた旅の空の浮氣心がその前半を占めて居ります。世間には人に理窟の一ッも云ひ、堅いで通つた人が、時にヒヨツコリ艶種を作ることもよくある習ですから、此處でも餘に極端な惡フザケに陷らない限り、陰慘な此一場を明るうすべきオアシスと見て良いと思ひます。前は二枚目でも後は立役と先年鴈治郎も話して居りましたが、此使ひ別けが容易でないので是迄から難役とせられて居るのでしやう。荷物に寄つて煙草一服、後向きに富士を眺めて居る處から、お米の歸つた跡を見惚れて肩を叩かれ、荷を擔ては いる急足のあたり、いかにも愛嬌たつぷりで輕く明るい感がします。併しそれよりも一層我等をひきつけるのは、いよ〳〵實の親と知つてからの眞實味で、年とつた父への孝行を忘るなと出立に草鞋はきながらお米への親みある意見や「人の命と芭蕉の露と」例の臺辭から「降らねばよいが」と氣を變へての引込など殊に情愛の深いものです。千本松原で呼かけられた時、花道で灯を消さず、急いで舞臺へ行て引き廻で提灯を覆ひ、あたりにお米孫八の忍で居る氣配を覺つてからフツト吹き消します言ひおとしましたが誰でも着て出るいつもの合羽を鴈治郎は引廻に改めたのです。

平作が腹切てから「孝行の仕納」と此引廻をかけて後から抱きます。重傷の父から手を放して立上るに忍びないとの解釋ですが、其位置で笠着せながら「九州相良」を云ひ、最後には抱いたまゝで合掌させますが、一般にあまり芝居をせずに情熱の籠つた演り方です。仁左の平作は是まで鴈か相手した坂東太郎、齋入、段四郎などの中で尤も特色あるもので、見物の喜ぶにつれ極り〳〵であまりに際立つた技巧や、時々ヒヨイと肩すかしを喰はせる樣な平板さなどは別として、大體地の巧い人である上に、絃と寫實の間をうまく調和させて行く手際は敬服の外なく、先づ當代比類ない平作と云つて然りでしやう。とにかく七十と二十八の親子をそれ以上の兩人がやるのですから、枯淡と洗練そのものゝ展開で、五月の中座に於ける最も期待すべき舞臺面の一であらねばならぬと信じます。

『新薄雪』の思出

中村鴈治郎

「新薄雪物語」……若い時からでは、今度で丁度六度ばかりやつて居ます、妻平も民部も、左衛門も、兵衛もやりました。昔から公家に起つた事件を扱つたものとして、同じ歌舞伎狂言中でも、「新薄雪」は隨分八釜敷く云はれて居ました。

同じ公家を扱つたものゝうちに、妹脊山、菅原がありますが、これ等は何れも歌舞伎の大物として、非常に約束の多い狂言です。延若(先)仲助、團藏、翫雀(父)などが、よくこの狂言について話して居ましたが、れを聞いて居ると、とても、この狂言は恐ろしくて手が出せないやうな氣が致しました。

主要人物は云ふまでもなく端役に至るまで、それ〴〵古く傳はる型があります、それに役も隨分多くあり、餘程の大顔合せでないと昔から此狂言は出さないものとなつて居ます。

だから、この狂言の上演記錄を見ても判るやうに、ほんとうに、ポツリ〳〵としか出て居ません。此度は東京より松島家始め、立花屋紀の國家が見えて、久々の東西大顔合せですから斯うした大役揃を出す事も大變意義があると存じます。

公家を扱つたものは、ひとり「新薄雪」に限らず、どの狂言も美しいものですが、この狂言はまた格別綺麗です。

昔は清水寺の場の大膳は、大てい民部や兵衛に廻る人が出て居ました、大敵であり、色敵であるので、紫の着附で、清水寺に於いて團九郎との顔合せは滿場を唸らせたものです。私が知つて居るだけでも、大膳を序から切まで通しで見せるのは今度が初めてゞす。明治三十五年三月、二の座(中座)でやつたのが、この狂言(其後堂島座開場式に上演)との當分のお別れでした。だから、それ以來道頓堀では實に三十年振りの上場ですが、この前の時は、奴妻平、民部、兵藏の三役を演りました、外の人では今生きて居る人はありません、たゞ、その時薄雪姫に扮した高砂屋位のものでせう。

『沼津』に就いて

片岡仁左衛門

「中座」も「沼津」も、私にとつてはとても思ひ出深いものであります。五月興行は久々で中座に出演する事になり、しかも沼津が出るといふので、乘り込み前から非常に愉快に存じました。

「沼津」は皆様御承知の方もあるだらうと存じますが、九年前に中座で上場いたしました。その時も成駒家と一所で、しかも、この時は本當に成駒家とは久々の顔合せでしたので、大變な好評を頂きました。その後、東京で成駒家と一所に沼津を出す約束――約束といふよりも、これは一所にお茶を呑みながらよもやまの話の序に話し合つたくらひのものでした

だから、其後東京でも是非一度出して呉れと、お仕打から所望されましたが、その都度お斷りいたしました。何も知らないお仕打は何故斷るのか、初めはその理由を不審に思ふ樣子でしたが――それでも强つてのすゝめに、前後二度ばかり演りました。

然し、これには條件をつけて、何時如何なる事情があつても成駒家が上京すれば必ずこの「沼津」を一所に演るといふ條件です。つまり本月私が誰かと沼津を出して、其の翌月成駒家が上京して來れば、また引續き成駒家と「沼津」を出すと云つた樣なもので、極端な例ですが、ともかく、さう云ふ事にして東京では演りました。

ですからこの「沼津」を、成駒家の重兵衛で出し度いと思つたのは、大正九年以來の願望で、今度それがやうやく實現された樣なわけです。

それに、中座は、私の若い時分の居城で、角座、辨天座、浪花座に、右團治(先)我童(兄)宗十郎(中村)雀右衛門(先)鴈治郎等の當時錚々たる連中を向ふへ廻して孔軍奮闘をつゞけた所です。この思ひ出多い中座で成駒家と「沼津」を出す事は、重ね〳〵の喜びであります。

新薄雪の考證　森ほのほ
『新薄雪物語』の思ひ出　倉田啓明
新薄雪物語雜記　高谷伸

新薄雪の考證

森ほのほ

□

江戸時代の草紙に「薄雪物語」といふのがある。寔にプリミティーヴな戀愛物語の二卷物で、元祿から五十年餘も前の寛永九年に上梓されたのが最初らしい。

「都のほとり深草の里にそのべの衞門とてやさしき男住みけり……」といつた風な書出しで、全篇殆ど男から女へ、女から男への文で構成されてゐる。そのべの衞門といふ二十五六の若い侍が清水へ參詣して、十六七の美女――卽ち薄雪姫を見染める。そして、それから全く戀に沒頭してしまふのである。彼が戀の成就を觀音に祈つて下向すると、圖らず姫の下女に出會ふので、これ幸ひと、姫の素性、住居などを訊ねて文を通じる。姫はなか〳〵色好い返事をしない。衞門が古い戀歌や、戀物語を例に擧げてかき口說くと、姫も同じやうな形式で返答する。一通毎に衞門の戀情は熾烈になつてゆく……。姫も初は頑强に對峙してゐるが、弱きものよ汝の名は女なりで、とう〳〵姫が負けて、心も肉體もゆるして了ふ。しかし美しい花は早く剪られる譬の通り、姫は淡雪の消えるやうに此世を去る。そこで男は無常を感じて剃髮するが、これも程なく二十六を一期として東山の庵に死んで了ふ――。

筋はかやうに單純なものだが、女に戀を拒絕されると、反對に男の情熱のだん〳〵に嵩まつて行くのが其ラブレターの一通毎によく現はれてゐる。それが面白い。兎に角、その當時は弘く愛讀されたものらしく、篁村翁は類板の多いのでも知れると云つてゐられる。

「新薄雪」の源泉が此物語に發してゐるのは申すまでも無いが此物語の筋はこれより以前に出版されてゐる「恨之介」(二卷)のそれとよく似てゐる。葛の恨之介といふ若侍が清水詣して木村常陸の娘と稱する雪の前を見染めるのが本筋であるが、それよりも寧ろエピソードである殺生關白亂行記の方に興味が深い。要するに、前の「薄雪」はこの草紙にヒントを得たものらしい。

□

元祿から二年前の貞享三年、森田座に上場した「薄雪物語」は、假名草紙の「薄雪」を題材とした芝居の最初のもので、大當りであつたと傳へるが、筋は分らない。次いで元祿十三年三月、山村座に「薄雪今中將姫」が上演された。作者不詳であるが、五段の續狂言で、森田座中村座の二代目團十郎を向うに廻して成功したものであつた。これは脚本が勝れてゐたといふよりも、中村七三郎、中村傳九郎、山中平九郎、松本兵藏等の役者の技藝の方に秀拔なものがあつたからであらう

前に述べた通り此狂言は五段に分れ、或は八劍王子（傳九郎）の反逆、或は北面の武士薗部衞門（七三郎）を中心とする薄雪の前（衞門の本妻——兵藏）花鳥の前（薄雪の妹——生嶋大吉）最中の前（右大辨の妹）の戀愛爭鬪、或は當時東西劇壇に流行の猫の執念の所作、或はセンチメンタルな子別れ等があつて渾然とは行かぬが、それだけ興行價値の多いものであることは推測される。そして仕組にも、臺詞にも演技にも稚拙な古劇味が多く——思切つて大膽なエロティックな場面のあるのも古劇味の一部分であるが——今の「新薄雪」とは大分趣の異つた、前世紀が遺した作物である。たゞ忘れてならないのは、此脚本から歌舞伎十八番中の「象引」が生れてゐることである。（「毛抜」「一角仙人」の或部分は、これからヒントを得てゐると思はれる節もある。

新薄雪物語について

實川延若

珍らしい狂言が久し振で道頓堀に見られる、イヤ見て貰へる事に成ました。今度の薄雪はホトンドわたくし本位です、それ丈仲々骨が折れます故、名優の型やら自己の苦心を見て頂く事です。本來なれば岡部兵衞役は成駒屋さんか松島屋さんが勤められる事と思ひましたが、私が引受る事に成まして少々見當違ひの感です、どうしたら左衞門の父に見へるか、兄にでも見へたら結構だと思ひます、鍛冶屋の團九郎は初めから私であらうと思ひました。兵衞は辭退しましたが是非にとの社長の命令でおぼつか乍ら引受たよふな次第です。岡部兵衞も團九郎も一通りの俳優では中々こなせぬ六ケ敷い役です。首尾よく勤まりましたらおなぐさみです、大阪市中の好劇家は申すに不及遠近の御贔屓に是非見て頂き度いと夫のみ祈つて居ります。二役共に父が大當を取つた役ですから一倍骨です。

□歌舞伎の「薄雪」に後るゝこと三十餘年、寛保元年五月竹本座に、文耕堂、小出雲、松洛等合作の操淨瑠璃「新薄雪物語」が上演された。

「大晏寺」「御所櫻」と續々に發表して、油の乘つてゐる文耕堂、松洛の筆に、床は此太夫以下新進の太夫、三絃の妙手友二郎で客を吸引した間もなく伊勢、大阪の芝居に移入したらしいが、江戸歌舞伎で上演したのは五年後の延享三年五月の中村座で、二世七三郎（左衞門、伊賀守）二世傳九郎（妻平）玉澤才次郎（薄雪）藤川平九郎（兵衞、正宗）等であつた。これも大當りであつたと傳

へられる。

院本は六波羅館、新清水、左衛門詮議、園部館合腹、薄雪姫道行、正宗内、敵討といふ段取、脚本の方は堀川館、清水、幸崎邸、園部邸、正宗内で、大體さしたる違ひが無い。中で所謂「三人笑」が技巧に於て、人情味に於て傑出してゐる。それ故「竹春比虎溪三笑」と名題を据えた時もある。

又、大阪では「花雪歌清水」などと呼んだ場合がある通り、けんらんたる清水の場も歌舞伎味の横溢した物である。後の默阿彌の「白浪五人男」の序幕、初瀬寺の場を始め、南北の「隅田川花御所染」(櫻姫と清玄)の三建目の如きも之を燒直したのである。默阿彌の「浮世清玄」の序幕、仲ノ町清水屋見世先の如きでは、「清水の舞臺を染め拔きし茶屋暖簾を」暗示的に用ひて、例の茶番的な趣向を誇つてゐる。

□

歌舞伎の「新薄雪」は延享の中村座以後、近くは三年目、遠くは二十餘年後に、屢々上場されてゐるが、天保から文久までが一番繁く繰返されてゐる。明治に入つては、二十一年十二月新富座で、團十郎(伊賀守、團九郎)左團次(兵衛、正宗)權十郎(民部、國俊)の名優揃ひで上演した。(この時、源之助が正宗の娘おれんで出てゐる。)

私が見た最初は、四十三年の四月、歌舞伎座で、芝翫(歌右衛門)八百藏(中車)猿之助(故、段四郎)女寅(故、門之助)歌六、松助、羽左衛門、梅幸、宗十郎、仁左衛門、それに菊五郎、吉右衛門を加へた大一座であつた。役割は今思ひ出せないが、序幕の清水の如き、例の「歌舞伎座ならでは」と謂ふ實に美事な道具立が先づ眼を驚かした。段四郎の團九郎の片手の夕テも印象が殘つてゐる。

次がそれから九年後の大正八年の四月、市村座の菊吉一座で大田村好みの出し物である。

役割を左に記さう。

菊五郎(兵衛)吉右衛門(伊賀守、團九郎)菊次郎(梅の方、まがき)三津五郎(國俊)菊三郎(國行)東藏——友右衛門(妻平、正宗)時藏(左衛門)男女藏(薄雪姫)國太郎(おれん)半藏(兵藏)翫助(藤馬)新十郎(大膳)

三人笑の場は三優勝負なしで、三人とも力の籠つた演出であつた。併し、吉右衛門の團九郎の滋味のあるシバキの巧さと、國太郎の色ッぽい可憐な姿とが、どういふものか一番深く印象されてゐる。吉右衛門は此時の二番目「春雨傘」でも、釣鐘庄兵衛で素張らしい演技を見せた。

『新薄雪物語』の思ひ出

倉田啓明

鴈治郎一座で「新薄雪物語」と「花競伊勢物語」とを、是非上演すべしといふ説は、かねてわたしの主張して來たところであつた。その「新薄雪物語」が、今度中座で鴈治郎、仁左衛門中車、宗十郎その他によつて上演されることに決定したのは、至極悦ばしいことである。この狂言については、わたし個人として忘るべからざる思ひ出がある。それはわたしが舞臺の上で鴈治郎を見た最初の狂言だつたからである。むろんそれはわたしのまだ小學生時代、おそらく明治三十何年がだつたが、はつきりした年月はもう遠く忘却の彼方に去つて當時の番附も記錄もないので、一切不明であるが、しかし主なる役割だけは、不思議にも記憶の底に殘つてゐる。鴈治郎はその時、奴妻平と葛城民部とを演じてゐた。薄雪姫は芝雀、園部左衛門は政治郎時代の福助、秋月大膳は荒五郎、幸崎伊賀守と團九郎とは團藏、そして園部の奥方は、或は福助時代の梅玉であつたか。

この狂言は、どうせ草雙紙から脚色したものだから、内容はそれらしい甘いものだが、序幕の清水寺舞臺花見の場のことき甚だ華やかな場面もあつて春芝居にはふさはしいものである。殊に多勢の腰元達が清水の舞臺で、遠眼鏡をのぞいて往來の男女の品定をしてゐる件なんかはちよつとナンセンスな味があるさうかとおもふと例の三人笑の有名な皮肉場もあり、親子の切なる人情を見せて、見物の涙を誘ふ用意も十分に具へてゐる。

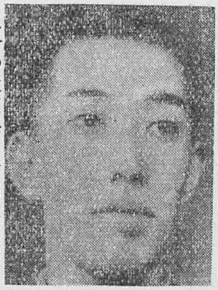
わたしはこれまで三度この狂言を見た。最初は中座で、次は東京の歌舞伎座で歌、仁、羽、中といふ連中、最後は市村座の菊、吉一座だつた。子供の時分だから鴈治郎の妻平が、多勢の水奴と手桶をもつての華やかな立廻りが頗るおもしろかつた。その頃の鴈治郎はたしかに美しかつた。三好屋團藏の皮肉な藝も頭腦に殘つてゐる。薄雪姫と左衛門とのエロチシズムも、草双紙らしい味があつて興が深い、詮義の場で敵役の秋月大膳が「心といふ字に刄を描いたのは、忍べといふ意味だ。」とか何とか言つて、呑氣千萬な探偵眼を發揮するのも、むかしの歌舞伎らしい。然し、何と言つてもこの芝居の正念場ともいふべきは三人笑の件であらう。園部兵衛と、幸崎伊賀守がわが子の左衛門と、薄雪姫の不義いたづらのため、首級を討たねばならない退引ならぬ羽目になつて互にわが子の生命を助けたさに一命を抛つて赦免を願出に赴くところ、即ち伊賀守と兵衛は各々わが子の首を討つべき首斬刀で蔭腹を切つて、双方の心底の符合したのに會心の笑を洩らし、はては兵衛の妻と三人で、痛手を耐へて笑ふところが、所謂三人笑の皮肉場である。

私はその伊賀守を、故人團藏以來、仁左衛門のも中車のも吉右衛門のも見てゐる。團藏の溢い技藝はもとより結構なものであつたが、仁左も中車も吉右も、いづれも適り役、今度の中座では二人の伊賀守役者がゐるわけで、どつちにお鉢が廻るのか知らないが、どつちにしても期待してよからうとおもはれる。

刀鍛冶團九郎も、この芝居ではなか〳〵重い役になつてゐる今度は誰が演るのか知らない、まづ中車あたりの役所だらうけれど年をとつてゐるために潑溂味が乏しく、弱〳〵しくなりはしないだらうかと危まれる。私の見たうちでは團藏のは遠い昔のことで、頗る印象が稀薄になつてゐるが、吉右衛門が先年、伊賀守と二役演じたのがやはり眼底に髣髴する。この團九郎は序幕の清水舞臺もさることながら、やはり大詰で片腕を切られてからが見せ場だらうとおもふ。とにかく「新薄雪物語」中での儲役である。園部兵衛夫婦も勿論大役に相違ないが、兵衛の方は辛抱立役とでもいふか、貫祿のない俳優では、到底ものにならない。この點、やはり鴈治郎が適材適所にちがひない。

思ひ出すまゝに

林　長三郎



只今の大阪毎日新聞社に成つて居る所です、其時私は親爺の手より離れまして單獨にて博勞町の稻荷の芝居に出て居りました、大藏卿と下屋敷の若狹と文屋の喜撰を上演して居りました、是は十六歳でした三回目の此度の薄雪で役を致しますのが私の最初の出勤です。

五月中座新薄雪に付ての思い出、私の九歳の時に親爺の民部にて詮議場の役のときに後見して居りましたが、親爺の後ろにもたれるやうにして居りましたので、顧みてをもたい〳〵と言はれましたことを覺えて居ります。二回目の時は堂島座のこけらおとしでして、

さて、以上は單に私が往時見た「新薄雪物語」のとりとめもない思ひ出に過ぎないのだが前にも述べたやうに、どういふものか今もなほ鴈治郎の奴妻平のみが甚だ鮮明に記憶の底に殘つてゐるのは、われながら不思議なくらゐである。そして今度は一番若返つてこの妻平をやつて見せてくれたならさぞ愉快であらうと考へてゐるが、おそらく若手に花を持たすのではあるまいか。むろん妻平の役は、さして大役でないが、然し立派な貫役である。往昔花形時代の鴈治郎がこれに扮して浪華の婦女子を惱殺せしめたのも、決して故なきことではない。況んや、私が鴈治郎を見たのは、この妻平が最初であり、しかもその砌私の坐つてゐた桝の周圍の女の見物は皆一樣に一菱の花簪を頭髮に挿してゐたことをおぼえてゐる。さうなると益々なつかしい思ひ出である。たしかその時は、第五回內國勸業博覽會が天王寺に開催された明治三十六年ではないかとおもふが——さてちよつと想ひ出せない、然しいづれどなたかが、この雜誌でその際の記錄を執筆されるだらうから、それを樂んでゐる次第である。

新薄雪物語雜話

高谷　伸

現代には微苦笑と言ふ言葉がある。しかし、生命を懸けて義理を立て人情を守つた時代には、そんな微温的事で無く、もつと烈しい泣き笑ひがあつた。「新薄雪物語」の三人笑ひがそれである。

園部兵衛夫婦も幸崎伊賀守も、お互ひに子供を逃がし了せた安堵から來る、ほつとした笑ひ、しかも、その背後には腹を切つてゐる二人に刻々迫つてくる死の影がある。

生命を棄てゝ子に代る親の根強い愛と、その完了から來る皮肉な笑ひ、淨瑠璃作者としては、絶好の狙ひ所である。

「新薄雪物語」はこれを中心として、寛保元年五月、竹田小出雲、文耕堂、三好松洛、小川半平の四人の手に成つたものであるが、武士道的な父の慈悲の發現を見るまでに、幸崎の娘薄雪姫と、園部の息左衛門との美しい戀がある。園部家と幸崎家との、親と親との悲みを生む前に、子と子との甘い喜びがある。その明暗の對照が、全篇の骨子であり、立作者の技倆を見せた所である。

今一つの作者としての技巧は、左衛門と薄雪とに、初戀らしい純眞を見せ、妻平と離とに中年らしい戀の技巧を見せ、前者には秋月大膳を、後者には澁川藤馬を配し主從で二組の三角關係を完成した、がつちりした構成を見せてゐることである。

作者はさらに大膳の惡心を現すのに、奉納の劍を一擧兩得的に使ひ、一は國家調伏の反逆に用ひ、他は調伏の疑ひを左衛門に掛けて、戀の叶はぬ意趣がへしに用ひ、社會惡と、個人惡の兩刀を見せ、その刀から團九郎といふ挿話ではあるが興味のある人物を鍛え出してゐる。

團九郎の父正宗は親が子に勘當されるといふナンセンス味から、惡事をする手を切り落した代りに、妹を聟との手を握らせたり洒落た所を見せ、團九郎は惡心から善心への轉換に片手の面白い殺陣を見せる。かやうにして奉納の劍を中心に、時代に對する世話場を見せ、また姫の戀が花の清水であるに對し、正宗の内を楓の龍田として、作者の均齊に關する意圖を示してゐる。

このやうに、完全な戯曲構成を見せてゐる「新薄雪物語」は、操りから歌舞伎へ移植されて、顔揃ひの一座で數次演ぜられたが、近來あまり舞臺では見かけなくなつた。

先旦淨丑、殆んど歌舞伎のあらゆる役柄を揃へた格好の顔見世的狂言でありながら、近來あまり用ひられないのは、その中心の場である園部館が、あまりに澁くあまりに皮肉であるから

である。

筆者もこの三人笑ひは大正九年五月東京歌舞伎座で、仁左衛門、中車、歌右衛門の顔揃ひでこの一幕を見た以來である。東京でもその前大正八年四月、若手の精鋭を揃えてゐた市村座で殆んど通しで出したのと、明治四十三年の歌舞伎座で、やはり仁左衛門中車歌右衛門などがまだ八百藏芝翫時代に、梅幸宗十郎女寅などの大顔合せで出た位なものであらうさらに溯ればまう團菊左時代である。

鴈治郎の妻平が、堂島座の開場式に美しかつたのも、數へて見れば二十昔以上であらうし、明治三十九年、角の芝居での、仁左衛門の兵衛、橘三郎の梅の方、齋入の伊賀守、梅玉の民部嚴笑の大膳、延若の左衛門、福助の薄雪姫といふ顔合せも、今は記憶する人さへ少ないであらう延若も延二郎、福助も政治郎の昔である。

それ以來、道頓堀の芝居に出たか出ないか、ちよつと思ひ出せない。

兵衛も伊賀守も、年功といひ藝といひ老熟の域に達した人でないと難かしい。三人笑ひの腹藝もだん〳〵味はう人が減つてくることは爭えない。しかし清水の舞臺の美しさは、いつまでも變らぬ錦繪情調である。

繪の中から脱け出したやうな、水の滴れるやうな美しい繻子奴妻平の立廻り、賑やかな囃子につれて、大勢の奴を枷に面白いしぐさのいろ〳〵、とんぼをきる奴の足も足、足、足の世の中にはほ肉にも面白いリズムを持つてゐる。

歌舞伎情皮の絢爛な夢に充ちた清水の舞台、歌舞伎芝調の重厚な腹を見せる三人笑ひ、その兩面の妻居を持つた「新薄雪物語」の、暫らく道頓堀に愛れなかつたのは、あまりに役者を擇びすぎた結果ではないか。と、すれば、擇ばれた役者たち手になる今度の舞臺は、久しぶりの芝居らしい芝居として、とにもかくにも近頃での收獲で無ければならない。

私の役々について

市川松莚

御當地は改名以來初めての御目見得で御座います、訥升時代には度々御招きをうけましたが、今度東西大合同の一座に出演致します事は光榮ともぞんじ且又、御懷しい皆樣に御拜顏を得まして、此樣な嬉しい事は御座いません。

私は當興行で一番目ではおれん、中幕でけさ御前、どんつくの藝者お高の三役を勤めさせて頂いては居りますが、私に取つては非常な大役で御座いますので、伯父さん達に色々と敎へて頂きました樣なわけで、到底皆樣の御意には入りますまいと存じますが、どうぞ何分の御引立をお願申上ます。

中座東西合同大歌舞伎上演

新薄雪物語

——四幕——

序幕　洛東新清水

鎌倉幕府の慶事に就て、六波羅の管領から一口の劍を獻上することになり、その劍の鍛手は當代の名工來國行と極まつた。そして國行が見本として差出した自作の一刀影の太刀は家臣園部兵衛の一子左衛門をして清水寺へ奉納させることゝなつた。折から地主權現の花盛り、櫻狩りする群衆の中に幸崎伊賀守の息女薄雪姫の一行があつた。

「姫君さま御覽遊ばせ、春來れば又逢ふ事の櫻花、見事なことでござりますなあ」と、侍女の一人が盛りの花に感嘆する折柄、他の一人の侍女が「此の眞中の坂道を下より登る群衆の中ひときわ目立つ優姿の……」

と、當の園部左衛門が奴妻平を從へ奉納の刀箱を持つて出て來る。

「歌のてにはに櫻をば、雪か雲かと疑ひも晴れて長閑けき彌生の空」

「咲き揃ふ花に觀音へ歩を運ぶ、諸人の歸りも知らぬ法の庭」

「けふのお供に下郎めが氣も延び〳〵と春の日の焦れ〳〵て清水に憂さを忘る花見時」

「ひと目千本吉野路の」

「花も及ばぬ御寺の景色」

「何は兎もあれ方丈へ」

「まづ〳〵」

と、左衛門の言ふをきつかけに割臺詞になつて本舞臺へ掛かると、緋の衣の　　坊が同宿二人、小坊主二人附添ひで迎ひにいで來り

「是は〳〵左衛門樣には只今お越し、まづ以て今日の御參詣私ならぬ公用、近頃御若勞に存じまする」

と、是にて左衛門笠を取るを、薄雪姫ちよつと見て思ひ入れあり、侍女の一人は妻平を手招きなどしてゐる。

はしなくも邂逅た美男美女、姫と左衛門との間に戀の心が通はずにはゐない。

二人の仲を取り持つは奴妻平と侍女籬の想思の二人。

「姫君樣、又となき此逢瀬」

と、籬は面はゆげな姫を促して兼ねて用意の短册にさら〳〵と優しき水莖のあと。

籬は更にその短册を持つて。

「姫君樣の此歌の下の句はあなた樣が」

と、左衛門の手に渡すと。

「むゝ……枝高き花の梢も折れば折る及ばぬ戀と……」

と、左衛門は詠み終つて矢立を取り出し、下の句を認める。

「……及ばぬ戀もなるとこそきけ」

籬の詠み終るのと共に、

「左衛門樣お嬉しう存じまする」姫の面にさつと一沫の紅がさす。やがて左衛門は今日の大事のお役目遂行のため本堂へ。

その後へ、秋月大膳と正宗の一子團九郎の恐ろしい毒手が擴げられる。大膳は豫てから姫に深く思ひをかけてゐたので、當の戀敵を陷れるばかりか、あはよくば六波羅を……鎌倉を……と言ふ野心の下に團九郎としめし合せて今奉納したばかりの影の太刀を盜ましめ人知れず調伏の鏃目を入れさせ、剩へそれとさとつた國行を手にかける。

二幕目　幸崎邸詮議

前幕の後刻。

鎌倉幕府を窺ふ謀叛人に一味した奉納太刀へ將軍調伏の鏃目を入れた曲者といふ大膳の申立てによつて、左衛門も薄雪も詮議を受ける身となつた。裁きの役は管領家の家老葛城民部之丞、双方の父も大膳もその場に立ち合ひます。

「是さ左衛門、何をうぢ〳〵よも知らぬとは言はれまい」

と、飽迄左衛門のみを陷れようとする大膳の魂膽。

「あいや、この左衛門、其影の太刀奉納の砌同道したる國行こそ……」

と、左衛門は無實の證據人として國行の名を擧げるが、國行は徒らに死骸となつて其場に運び入れられるので、死人に口なく此上辯解のすべもない。

叡智の民部はそれとさとるが、かりそめならぬ將軍呪咀といふに、ゆるがせならぬと表面は强く、その裏では情の計らひ。詮議の間左衛門は幸崎伊賀守へ、薄雪は園部兵衛へと、それ〴〵預けることにして後日を待てと若氣の二人をそれとなく誡めます。

三幕目　園部邸合腹

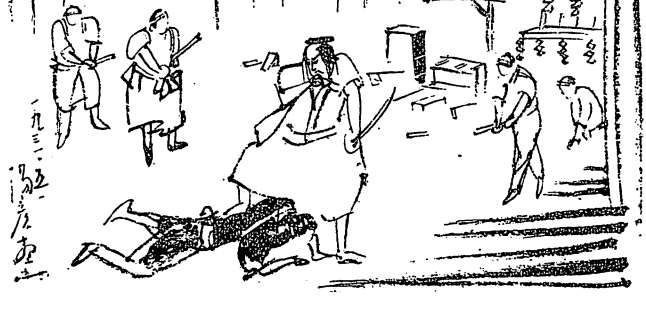
既に兵衛と奥方梅の方は民部之丞の計ひで預かつた薄雪姫に侍女籬と想思の奴妻平を添へて大和路へ落しました。

如何なる咎めも身に引受けて最愛い我子や嫁の身を思ふ心。折から伊賀守の使者刎川兵藏が影の太刀を携へ來り、唯今左衛門の首を討つた、我が娘もその如くなされよと言ひ置いて去ります。

殘された太刀の疊りをみて、一切をさとつた兵衛は薩腹を切つてやがて入り來る伊賀守を迎へますが、子を思ふ親心に二つはなく、伊賀守も左衛門を落して既に薩腹を切つてゐました。

「さて〳〵二人の子を取り替へ預かつた其夜より今日迄の心苦しさ、笑ひと言ふもの殆んど忘れた伊賀どのも、さこそあらん」

「心懸りの子供は落ち、斯程に覺悟決めたる只今の心安さ」



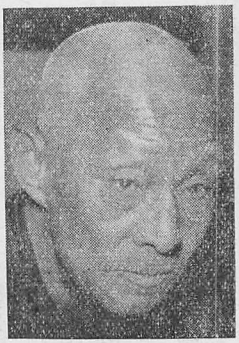
「六波羅どのへの出仕はすぐに六道の門出」
「いざ喜びに一と笑ひ……」
「それもよからう、奥も笑やれ」と、茲に伊賀守と兵衛とそれか梅の方らのあの有名な三人笑ひになります。

大詰刀鍛冶

大和の刀鍛冶五郎兵衛正宗は弟子となつて入り込んだ國行の遺兒來國俊に家の祕密の湯加減を教へるが、湯加減を盜まうとした我が子團九郎の片腕を斬つて落し。
「やい倅め……おのれひそかに大膳が惡事に加擔し園部、幸崎の兩家を潰し國行が死んだもおのれが仕業であらうがな」
と、血涙を絞つての訓誡に。
「親仁樣、あやまつた〳〵、當春六波羅へ召されし時、秋月大膳に賴み込まれ、慾にふけつて惡事に組し、園部、幸崎兩人を咎に取つて落さんと、影の太刀に鑪目を入れしはこの團九郎……父の諫言骨身にしみ今といふ今本心に立歸つた。親仁樣、唯何事も敕して下さりませ」
と、さしも無賴の團九郎も一心發起し、愈〳〵大膳の奸策を未前に防ぐことになります。

當麻寺

年中行事の一つである當麻寺の練供養に參詣の善男善女がいつぱいに溢れてゐます。折から大膳の計略で練り供養の中に觀世音菩薩の拵へで出てゐる衛門を討ちとらんとしますが、既に危い所へ
「待て、待て、待てえゝい」と、心を改めた團九郎は贖罪のため揚幕から聲を掛けて出て來り花道にて、
「けふ御開扉の當麻寺、彌勒菩薩摩訶薩の御尊前とも憚らず、理を非に曲ぐる秋月大膳、魔王變化の通力に佛の顏を撫るとも、この團九郎面はまぶれぬ、六道ならぬ六波羅の館にさばり數々の積んだ惡事をおもりにして、地獄の底へ眞逆樣、ぎり〳〵落ちてしまひさらせ」
と、「さてはおのれ變心したな」と言ふ大膳の言葉には耳もかさず、左衛門を始め薄雪、國俊に味方して首尾よく親々の敵を討たします。



平清盛に就而

市川中車

此度の五月狂言「勢平家物語」二幕。之に就て一寸御咄し致しますが、私が初演の折は大正十四年五月東京歌舞伎座、其時の西光は市川左團次丈、皆さんが清盛の出る狂言は私が持役のやうに御思召しますが、そこで私としては何か新たに研究致し度いのですが、御好劇の皆樣方に對し左まで新工風を致さうより兎も角も傳說の有る濶達な素性を其儘に顯はす事を謹で勤める考へで御座います、衣裳も其折のまゝ白襟襦袢、くすべの足袋、白羽二重の半着付、糸綿の段〻切唐花の織出し、白裏水干、はさみ込み、淺黃龍紋の下帷子附、つゆ紐、紫に白の段打、菊とじは此役に限り、三ツ附く、上は黃色中は紫色、下は黃色(大詰)白襟襦袢、白羽二重、大丸袖の着付、朱色、龍紋の素けん、白龍紋のさしぬき、當て帶、白龍紋、足袋は前の通りにて御覽に入れます。

『新薄雪』追慕

高原慶三

五月の中座は珍しく「新薄雪物語」が出るさうだ。頗る結構有難い。

こんな歌舞伎味の豊かなクラシックはちよつと類がない。

何故出なかつたのだらう。

「うすゆき」解け易いといふ御幣をかつぐためださうだ。

何にしてもそんな御幣なんか吹飛ばしてカブキのオン・パレード、こんなガッチリとした大時代物を精々やつてもらひたい

「新薄雪物語」に對する私の追憶。

最初明治四十何年？　の正月芝居で、御霊文樂座で故人攝津大掾の「鍛冶屋」の段を聞いた事がある。

これで私は攝津大掾から屢々劇眼を授けられたものだ、そもそも「伊勢物語」の春日野の場を初めて識たのも幼稚園時代に越路太夫といつた頃の攝津大掾によつてだつた。

こんな事をいつても餘り自慢にならぬ、年齢が知れるだけ恥しい。

歌舞伎で記憶のあるのは現在大毎の所在地の前に在た堂島座のコケラ落しに、たしか「新薄雪」が出て鴈治郎が奴妻平をやつた筈だ。

明治四十何年かに東京歌舞伎座で仁左衛門の兵衛、中車の伊賀守、歌右衛門の梅の方、羽左衛門の國俊じやつた筈だ。

だが、私はこの二つは見てゐない。

初めて歌舞伎で見たのは大正二年頃市村座の菊吉等の全盛時代だつた。

今の友右衛門が東藏時代に妻平と正宗、故菊次郎の芙雀が籬と梅の方、菊五郎が兵衛、吉右衛門が伊賀守と團九郎、萩の方が死んだ河原崎國太郎、男女藏の左衛門、時藏の薄雪姫、勘彌の國俊彦三郎の大膳のやうに記憶してゐる。

歌舞伎劇の構成美としても序幕の新清水の花見の場は、例へ

ば「菅原」の加茂堤の場と同樣、薄雪と左衞門の逢引は苅屋姫と齋世親王の逢引に當り、取持役の妻平と籬は櫻丸と八重のアナだ。

そうしてこの妻平なる色奴の美しい立ち廻り、櫻花らんまんたる朱の勾欄の清水の舞臺、歌舞伎美百パーセントだ。

それから詮議場、こゝは葛城民部の見せ場虚々實々と秋月大膳の肚をさぐる、先代萩の勝元のやうな役だから、鴈治郎適任と今から極めがつけ得やう。

次が「三人笑ひ」薄雪の父伊賀守、左衞門の父兵衞が、お互ひに我子の首打つと約束しながら自らかくし腹、切て義理と子の愛のために身を果す、行爲が割符のやうに合して「虎溪の三笑と名も高き」と、腹切りながら大笑になる處は澁い。

「鍛冶屋の場」はしめ張りわたした刀鍛冶の場面の清淨さ、國俊正宗の配置はちよいと能樂の小鍛冶を思はせる、典雅さがある、そこへ颯爽たる團九郎が突如現はれて湯加減の秘傳を探るべく、湯にひたした手は忽ち一刀のもとに斬られて、初めて惡心を飜へす。

この明快にして清朗たる歌舞伎美の豐かなる、類型のない場面である。

こんどは延若が團九郎をやるさうだが、歌舞伎的滋味に富む點で、まづ東西を通じての團九郎役者だと、見ない前から折紙をつける事、あら〳〵かくの通り。

中座出演に際して

澤村宗十郎

寒い冬もいつの間にやら過ぎて、朝夕居心地のよい陽氣となりました折柄、御當地中座五月興行東西大合同の一座に御招きをうけ、あこがれの御地に御目見得致す斗りか、お懷しい皆樣に御拜顏の榮を賜りました事は、此上もない光榮と存じます。

今度は松島屋、成駒屋の兩先輩が、將來後輩の者の手本とも成べき沼津を上演になられましたが、その中に私はお米で及ばずながら共演させて頂いておりますが、御存じの通り娘お米でなく、婆アお米の方に近い、とげの立つたお米では御座ゐますが、その所は何分の御見退がしをお願申上置ます勿論この役は初役なので御座ゐます。

震災前東京の帝劇で、やはり松島屋丈の平作で重兵衞を初役でつとめた事が御座ゐましたが、それから餘程月日も立つて居りますので、沼津と云ふ狂言には初見來同樣なので御座ゐます、只是迄に殘された名優の型と、私の新工風とを取りまぜて御らんに入れて居ります樣な次第です。

中座東西合同大歌舞伎上演

山崎紫紅作

平清盛

一幕

（一）福原淨海の館

都と違づて夜になると一段淋しいこの館では侍女の二三が――都へ早う歸りたいなど雜談に耽つて居ます。其處へ侍の一人が、佛御前がお着きになつたと知らせて來ます。それを取次の侍女から聞いた清盛は、化粧も亂れて大事ないほどに早う館へ參上せよと傳へさせるのです。

程なく、奥から姿を見せた平清盛入道淨海――下手に主馬判官盛國出でゝ平伏し、福原の繪圖を差出す。それを受取り開き見ながら、心から寛ろいだ樣に清盛は

「山の形、水の姿、いつも廣々として心地が好い――それに引替へ都住居の窮屈さ、めの箱住居の平安城から都を爰に遷し、公卿共の眠りを醒ましてやりたい……」

と心から愉快ばに盛國へ話しかけるのです。やがて佛御前が侍女に案内せられて、その室に來ますそうして更に繪圖を拜ませながら

「そちが今通つて來たこれが生田ぢや、またこれは須磨の里、明石の浦……海邊に行つて見よ、汐の中に浮上つて見える淡路島ぢや」

「通ふ――の聲聞けばと歌の通りに近い所でござりますな」

ぢつとその言葉をきゝ、その姿を清盛は嬉しさうに見守るのでした。そうして、そちを呼び下したは舞が見たいからぢやと――佛に舞を所望するのです。

と、その折に夜陰に多田藏人行綱が伺候したと侍が、清盛に言上するのです。面倒だと思つた清盛は事もなげに重ねて參れとすげなく追ひ歸さうとするのでした。傍に居た盛國は不審にかられ、事の仔細を問ひ質すべく清盛の前を下つて去ります。

性急な清盛はやがて

「さ、佛、重衡の琵琶で舞ふて見せい」

と、重ねて、佛の舞を所望するのです。佛が舞の仕度をすべく一禮して座を退ると、入違ひに、盛國が引返して

「行綱申しまするには天下の大事、直々御面會の上ならでは申し上げ難しとの事でござります」

清盛はそれよりも佛のあでやかな舞が見たかつたのですが、餘儀なく事の重大さを豫感してか、逢はうと言ひます。然し、行綱は源氏の一族――何樣な略みがあるとも計り知れないので、琵琶を用意して來た重衡に長刀を持てと命じます。

行綱より清盛は意外なことを聽くのでした。

「近頃院中の人々兵具を調べ多くの軍兵を集めらるゝこと御存じにござりますか」

清盛は初めそれを事もなげに、それを打消さうとしたのですが、

行綱の言葉は更に續いて

「新大納言盛親の御使によつて、鹿ケ谷俊寛僧都の山莊を訪れ申せば盛親卿を初めとして、御子少將盛經、主人の俊寛、平判官康頼、西光法師」

「なに大納言の親子がゐた！」

清盛は驚いたのです。そうして、その座にある瓶子を誤つて二つに破れたのを見て、大納言が平氏が倒れたと云つたのを聽くと清盛は激しい憤りにかられて、

おのれ、思ひを知らして……とばかり、

「舞はやめにせい……今より用意致して京へ上るぞ」

と叫びます。

（二）西七條の辻

餘り暇はしからぬ處、西光法師が寄進した、都六箇所の辻に建立した大地藏、春日造りの小な祠があつて、ねだの花が咲いてゐる。暮て間もない時刻。

野伏が去つてゆくと、行綱が出てぢつと見送ります。其處へ通り合したのは彼の郎黨彌三郎です。

そうして聲を秘めて、殿！殿！と呼び、入道の館の物々しさを審さに物語るのです。それによると、西光法師も既に捕へられたと云ふのでした。

「殿の鶴の前を奪ひ居つたあの僧俊寛めも今頃は繩目の恥を……」

「とはいへ……とはいへ行綱は暨ひを破つた、同志の方々を裏切つた、天下の大事をあの鶴の前一人の爲めに……」

と、同志を裏切つた行綱は惱み悶え、心がゝりの成親卿の安、を見屆けさせるべく、館へ遣はすのでした。

と行き違ひに行綱の郎黨藤五郎が、鶴の前と共に通りかゝるのでした。この時二人の跡をつけて來た數名の武士――その三人を取卷く。

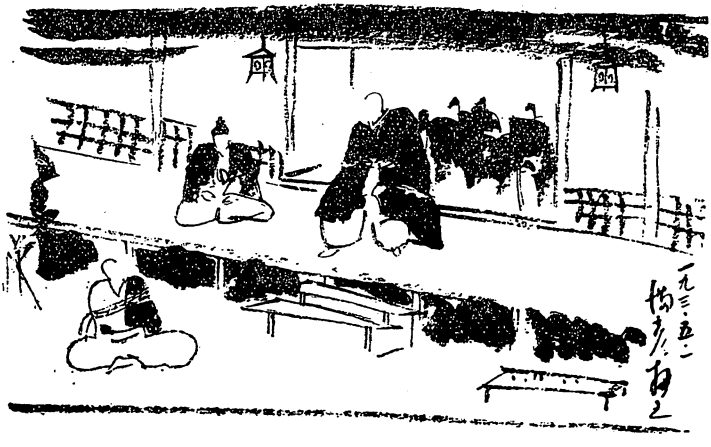
刹那――

あはたゞしく駈けて來た盛國が、その爭ひを押し止める。

「行綱殿、謀叛の一大事を未前に押へ、入道殿の御利運となつたも偏にお身の御注進――莫大の御恩賞樂んでお待ちなされ」

そう言はれゝば行綱の心は更に苦しくなつた。一同の者が去つた後、鶴の前は無念氣に行綱を見据えて

「あなたは裏切者におなりなされたのぢや」



「そちこそ大の裏切者ぢや」
あの夜に行綱は自分を背いて色好みの俊寛に鵺の前が侍づいたのが憎らしかつた。目もくらんだ。膽も沸き返つた。武門の意地——彼の逸馬自然となり鹿ケ谷から兵庫へ
だが、鵺の前にして見せれば、その深い仔細も察せず、源氏の武夫が平氏の前に膝を屈めた、行綱が口惜しいと思はれたのです。
已に、心を決した行綱はこれまでと思つてか、太刀を拔いて斬りかゝる。驚いた郎黨藤五郎は押し止めやうとするが
「運が何、行綱は裏切者ぢや、え、同志も死ね、敵も死ね、行綱も死ね、何もかも滅びてしまへ」
と叫びつゞけながら、鵺の前も斬り倒す。

（三）西八條館

筑後守家貞に西光法師は引出さるのでした。
清盛は立つたるまゝにて西光を見下し、
「當家に謀叛を企つること訴人によつて明白ぢや、事のよしあしを申せ」
然し、西光はそれに應じやう答もない。
「瓶子を以て入道の道になぞらへ、當家へ謀叛を企てたであらう」
だが、それに風す西光ではない、輕く笑ひ物を敎へる如き口調で
「いかに威光を振はせられても、身分は同じ臣下、官位の差別はあつても臣下の別にはあらずや」
清盛たまりかねて、椽を飛びおり、西光を踏み躙る。その折、杉浦太郎入り來つて、
「行綱の行衛は分りましたか、それにしても心得ぬ若き女を斬り殺し、己も腹一文字に掻き切つて見事に相果て居りました」
行綱の自殺を知つた西光は感慨深くきいて呟くのでした。
「女は眞に義理を知つたな、行綱は友を賣つても不義の望みを達することは出來なんだか——天の罰は斯くの通りぢや」
「え、又も口を利かするな」
「西光の口を裂いたとて天の口を裂かれぬわ」
清盛はます〳〵激昂する

主なる配役

平相國入道清盛	中車
三位中將重衡	成太郎
主馬判官盛國	大吉
筑後守家貞	吉三郎
肥後守貞能	八百藏
松浦太郎高俊	政治郎
多田藏人行綱	壽三郎
行綱郎黨彌三郎	九團次
同藤吾	駒之助
鶴の前	扇雀
佛御前	松蓮
左衞門入道西光	延若

作北南滿食

杜若戀在原

竹本連中

舞臺は三河國八ッ橋の澤を大和繪風に描きあらはしたる背景、竹本連中の出語り臺あり、これに太夫居並び一聲にて幕あくと、

すぐ床の淨るりになる

〳〵戀すてう三河の澤のかきつばた花紫のゆかりなき昔男の舞の袖。

三河の澤、長の娘八ッ橋染物の着附裾をひきこれに業平格子のかりぎぬ、下げ髪た冠着て舞扇を持ちやゝ戀に狂ひし體にて出る

竹〳〵思ひぞ出づる都人、心亂れて飛ぶ螢、くらきにこがす戀衣、きつて馴れにし我妻のかたみの花は今こゝに

八ッ橋　のう業平樣はいづくに

竹〳〵ちぎりし人も八ッ橋の、くもでに物ぞ思はるゝ今とても旅人にむかしを語るきのふのくれやがて馴れぬる心かな

振あるかきつばたを見入り

竹〳〵このかきつばた唐衣、きつゝ馴れにし妻しあれば、はる〳〵來ぬる旅おじぞ、思ひつもりて末かけて戀在原に別れこし、跡のうらみの唐衣袖を都にかへさばや思ひの露のしのぶ山、忍びて通ふ道芝の始めはあれど其儘にかたみはのこるこの花の、せめてかほよと呼ぶならば、今一度の逢瀨こそ水にうつせし我姿

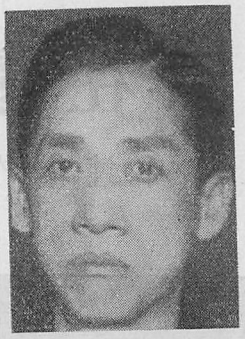
狂るひて水にうつし

八ッ橋　ヤッ業平樣か

ジッと水にうつりしかげを見てポンと冠を落とす

竹〳〵植置きし昔の宿のかきつばた、色ばかりこそ昔なれ、色ばかりこそ昔男の名をとめて、花たちばのにはひぞうつる似たりや似たりかきつばた花あやめ、あなたへ追ふやまほろしの、こなたへくるふうつゝなの、夜もしのゝめのあさむらさきのそのかきつばた戀のかげゆかりの色の夏の雨、袖をぬらせし物語り、あはれやふみも古井筒狂るひ狂るひて

よろしく見得にて狂ひながら揚幕へ這入る



五月狂言に關しての愚感

志賀廼家淡海

過る年今も同樣京都の京極の管轄は五條警察署であります、當時署長さんが其當時京極の開演中の演劇演藝の諸座の中から主任と次席の者を演劇演藝に關しての注告座談會に招かれた事がありまして、當時の劇團の知名の人や浪曲界の權威者や名人の落語家さん達の皆々座長さんの御顏を御見受けいたしました。私も末席を穢しに一人であります。話題は種々な諸藝に進み其最後に劇と云ふよりも芝居の事で署長さんが此の樣な事を申されました。「芝居は思想善導教化事業と云ひ傳ふが是が非か」とのべられた意見に對して諸家等は有力なるものとの意見に一致しました。次に署長さんから私の意見を徵せられましたので私しは答えました私が九州熊本縣人吉永案座に開演の際第三幕目の劇が終つて私が部屋に戻つた時の事であります。一見して人相の惡い板場風の男が私の部屋に轉げ込んで來て泣き縋られた事がありました。何故かと驚いた私が聞いて見ると其男の訴へは只今終つた劇の主人公があまりにも彼自身によくにて居ると云ふのである、其彼れを表現した劇のストリーは親不幸をし他人に迷惑を幾度もかけ又種々な惡事を重ねそして其主人公が改心した時には早兩親が此の世の人で無かつたと云ふ御なじみのストリー……。

彼れは「只今の劇は私の身の上と同じ事であり、そして今は詫びたき兩親が無いのでせめてあなたを親と思つてあなたの前に許しを乞ひ願ひ正道を歩み眞人間になりたい……」と、彼は私の前で誓ひました、私しは右の樣な事からにしてもたしかに思想善導である、即ち教化事業でありますと署長さんの前に答へました。「成程美談だ然し人を教化出來れば又惡い方にも導き安いから各自注意を懇願する」と署長さんが云はれ古歌に何やらと爲になる事を申されましたが私は殘念乍ら記憶いたして居りません。併し皆の中から只一人反對を唱へる人がありました當時の新劇界の一人故東儀鐵笛さんで「劇は教化ではなく只一つの民衆娯樂であるが故に技藝者は一時的に觀客の心理を捕へて歸し

又、觀客等は忘れられない印象を追ふて來る、其處で再び一時的に又觀客の心理を捕へ其心理の前に一時的な娯樂を見せるに過ぎない今日は今日の觀客に明日は明日の觀客に」とか何とか新藝術論を唱へられ「最後に芝居はほがらかに觀客の心理を捉へるべきである」と申されました。私しは最初その意見に對して其人の心理をうたがひましたが最後の一言には大いに共鳴いたしました、私は今でも過去と少しも變らない氣持であります。何故なれば今日の一人は明日の幾萬人の觀客よりも大切であります今日は今日の民衆に明日は明日の大衆の前に自由に生き伸びて行き私等の爲には成程娯樂ではありますが實に立派な思想善導教化事業でもある積りです今日此頃は演する技藝者よりも劇を見る觀客の目が最近如何程進んで居りましようか？　私らは劇其ものを一時的な娯樂であると思はれたくありません永久的の娯樂で一面に教化の一助にもなりたいと思ふのです併し其間に利益の問題があり經營者なる興行者側の懷中もありますから所謂興行價値百パーセントで尚且つ自分の理想に叶ふたものをと苦心して居る譯です。然し前にも記した通り劇は必ずしも社會教化のものゝみとは思つては居りません。第一義としては娯樂でありますから單に一時的の娯樂として見た眼に面白く見られるものも時に依つては必用であらう、それが世の中の進歩と共に益々其必用の度を增すものと思ひます。此の意味に於て最近私はそう云ふ方面へも歩みを進める積りで居ります。私自身よりも大切な觀客の前に大衆本意に立得る私は、何時も一時的な同姿で出現する事を望んでは居りません、歳月が移り今日は私等も姿を變へて進んで行かなければなりません時の移りと共に變つた物を望む大衆の期待に添ふて私も私の大衆の前に又目新しく姿を變へて愛を得んとして考案した變つた數種の劇を此の五月に御目見得として持參すべく京都で準備を調へました。「此度は淡海の演出が少し違ふね」と云ふ事即ちそれが姿を變へた私達の姿であります、然しそれも其變つて居ると云ふ事の爲に不案を感ぜられたのか興行者側の方で否決されました、私の變つた姿を私の大衆に見て貰ひたかつたのですが、それが出來なかつたのですが、それが出來なかつた事は誠に遺憾にたえません。

私しの大衆よ、御身等の前に私しの新しく變つた姿を見られなかつた事を話して下さい。

抱かれて今かえりかけた玉子を無情にも誰かゞ追ひ立てたので去つて行つた親鷄が歸つて來なかつたのと同然であります。かへりかけた玉子、變つて出る姿、私しは私しらが變つて出られなかつた變つた私の姿の私。

と云ふ樣な喜劇を演つて見たればどうですやらう？

大阪のお客様

河合武雄

今度特別興行として十五日間角座に大衆劇の名の下に廣く皆様に御目見得する事になりました。大阪は一昨年の六月浪花座に股旅わらぢをやりましてこのかた足掛け二年目になります、然し角座への出演は震災直後出ましたばかりで今度まるりますれば八年目になります。何んだが違た處へ行くやうな氣がしてなりません從て角座のお客様に對して本當に久々で見て頂く機會を得ました事を嬉しく非常に樂みにしてゐる次第です。今度は二部の編制で私は晝の部の一番目に母三人の育ての親である百姓の女房おみつと夜の部に眞山青果氏作の假名屋小梅の小梅を演ずる事になりました、この小梅も震災直後の時角座でいたしました。而して今度亦久々で角座へ出演するやうになつて亦小梅を演じてくれるやうに申されまして外にまだ見て頂きたいものもあるやうに思はれますが芝居の出し物といふものはおかしなものでやはり小梅に定つてくるといふ事は面白いものです。角座に此狂言が淺からぬ緣がある事でございませう、然し假名屋小梅を何度いたしましても面白く殊に眞山青果氏の爛熟の筆になりこれほどよく其時代の藝者の心意氣を探り得て縱横無盡の鋭い筆のメスは女の感情を抉り得て遺憾なく發揮されてをります。

此種の女性を描いた脚本として假名屋小梅は第一位に置かれる作品だと私は思つてをります。自分も此脚本に就いては度々の所演によりまして可成の自信を得てをりますつもりでゐますから眞山氏の描寫された小梅を相當に表現し得られる事と思つてをりますで自分も小梅は好きであり又深き同情をも持ち其生涯の徑路に多くの興味を感じてをりますので私の情熱と融合一致して幕毎に熱を帶びざるを得ず、否が應でも百パーセントの努力となつてゐるわけです、從つて皆様にも感興を起させ澤山の方に見て頂ける事と思つてをります。そ

何を言はんとするのか？

片岡我當

何んだか近頃の私はボンヤリしてゐるやうである、戰ひつかれた一兵卒が高い山から突落された旅人のやうな氣がする。だんだん人間が馬鹿になつて行くやうな、そして役者もだん〳〵下手になつて行くような氣がする。

こんな氣持に私は日々責めさいなまれてゐるのだ。この心の痛手をうけながら私にとつては第二の故郷、花の浪華に乘り込む事は實を言へば苦痛である。

大阪の皆さんに私はうそを言ひたくない、おせじも言ひたくない。只々自分の心持をうち明けそして惡い事は惡い好い事は好いと言つてもらいたいのだ。私を救つてもらいたいのだ。

私の今度の役と、皆さんに滿足をあたへる事が出來るだろうか千代之助も我當になつてかへつて下手になつたと言はれる事だろう。

父にすまぬ、それでは大阪でならした先代我當私の父をはづかしめる事になる、實につらい、だから五月の中座は死物狂ひでやるつもりだ、一生懸命になつて！

しかしそれは已の至らぬ藝を表現するだけの事かも知れない。

れにこのごろ東京で上演の際は時間の都合で大詰だけを切り放して一幕物として演せましたのを今度は序幕の芝居茶屋歌島の二階のあばれ込みの處から全部通してする事になりましたのでよく筋も通り整然として分りよく演じよくもありますし充分力を入れる事が出來ると思ひます。殊に大矢君が初役で兼吉をやりますのであの人の藝風がよく兼吉にはまつてゐますから小梅の効果を助けて充分の期待を持つことが出來ると思ひます。實際明治時代の藝者を書いたものとして何十年何百年先きの來る可き新らしい時代に於てこれが優れたる時代劇として演ぜられ貴き脚本として賞玩されて立派に後世を飾るでせう、丁度默阿彌が自分のゐた時代を描寫したものが今日は時代劇として尊重されてゐるのと同樣と思ひます。實に此世と生命を共にするものでせう。

母三人の私の役はこれは初役です。川村花菱氏の作になるもので三人の異なれる母の氣持をあくまで書き現はされた脚本で母性愛の尊さ眞に人の母たるの理路と情愛とを吐露してをりまして私は此脚本に接した時は涙なしには讀み得なかつた程です、いつの世になつても變らないものは人の親子の人情です。昔からこうした泣く芝居は大入だといふ事で殊に此度の如き馥郁たる香氣ある脚本の双璧と喜多村氏の凄艶なる豐志賀と相俟つて御見物各位の御滿足を得て大好評を博する事は疑のない事と思つてをります。

角座上演

作菱花村川

人三母

四幕・八場

第一幕　雪のたそがれ

東京を離れた北方のある田舎の往來。雪の降る夕方、下駄履で傘一つ持たない時子は生れた許りの泣き叫ぶ赤ん坊を抱いて來ますがもうへと〳〵に疲れてゐます。乳の出ない時子は可愛い子供良太郎に牛乳を與へたさに、一里半もある停車場迄行かふとして雪道に惱んでゐる處へ、村人の利三郎が來懸り、親切に乳は家に澤山あるからと、歩けない時子を背負つて立ちます。

貧しけれど

利三郎の家では、女房のお光が今日は生れて間もなく死んだ子供の命日だといふので、坊さんを呼んでお經を上げて貰つてゐます。其處へ利三郎が赤兒を抱へて歸つて來ますので、お光は不思議がりますが利三郎から仔細を聞いて非常に同情し早速張りつめた乳房を良太郎に含ませます。この夫婦の間には三つになる源吉といふ子供もあります。事情を訊かれた時子は、この正直な夫婦の前にすつかり打明けないではゐられません。小さい時から色々苦勞をし續けた時子は、好きで女優になつたのです、藝だけで進まうとした女、時子は遂に或人のものとなつたのですが、その人は義理から妻を娶り時子と別れる時が來ます。仲に立つ人があつて、事情を知つたその奥樣も承知で、子供を引き取つて貰ふ迄に運んだのでした。が、時子が先方の奥樣に會つた時「本當に有難いと思つて貰はないと困るかうして、誰の子だか分らない子を引取るんですよ……」と言はれて、時子は齒軋りして子供を抱へ取り、乞食をしても屹度子供は育てますと言ひ放つて別れたのです。それから母親としての苦勞の種となつたのです。譯を聞いた夫婦は、一層氣の毒に思ひ、丁度子供

が欲しくて淋しい時だ、是も何かの因縁だから赤兒を貰ひ受けたいと言ひますので、時子は夢の樣な情に胸が一杯になりますが、時子は折角の御親切をお斷りするに忍びないが、此子の大きくなる迄預つて欲しいと涙で頼み入りますので、夫婦は是も承知して我子と同じにして、しつかりお預り致します。安心して下さいと言ひます。時子は迎ひに來るのを一生の望みとして……一生懸命働くと……暫ひます。

第二幕　うつろなる幸福

或病院の一室。永らく入院してゐた葛原商會主清三郎が全快して愈〻退院の日が來ました。妻の眞砂子も來てゐます。其處へ院長が來ます、清三郎は入院中のお禮を述べ、自分には一人の身内も一人の子供もない、本當に私の事を考へて呉るものは家内だけで、結婚してから八年にもなるが子供が……更に自分の仕事は大きくなるにつけても、將來の事を考へると、院長に話します。其處へ樂しい土曜日だと言ふので、院長の子供四五人が迎ひに來て早う〳〵とせき立てるので院長は出て行きます。子供達を見送つた清三郎の眼からは涙が流れてゐます、清三郎は妻眞砂子に、あの子が居れば丁度今頃は小學校へ行く頃だ……永い間あの子の事を忘れた事はない自分等夫婦があまりにうつろのやうに考へられると思ひ切つて妻に言ひます。默つて聞いてゐた眞砂子は、あの子を引取りませうと言ひ出し、八年前の思ひ出にかへり、あの時淺はかな女心から、恩にきて貰ひたい一心に、卑しいことを言つた爲に、子供は連れて行かれた本當に母と言ふものになれない女の言葉でした。今からあの子の母として一生幸福に送りたいと清三郎に、深く〳〵詫び入ります。清三郎は始めて心のなやみがいやされたと喜びます。眞砂子は昔話の巡禮になつても捜し出すのが自分の罪滅しですと言ひ切ります。

春の小鳥

春の日の午後。陽が庭一杯にあたゝかく當つてゐます。縁側に小さい机を置いて、源吉と良太郎が坐り、庭の筵の上に利三郎とお光が坐つて子供に本を敎はつてゐます。二人の子供は極めてすこやかに育ち、源吉は小學校の三年、良太郎は一年生となりました。一家團欒の態です。そこへ近所の子供が鮒つりに誘ひに來るので二人共出掛けて行きます。明日は遠足日といふので二人に洋服を買つてやる約束がしてありました。

處へ葛原眞砂子が執事を連れて訪ねて來ます、利三郎と女房お光は子供を取戻しに來たのだと直覺します。八年前にお時から預つた當時の事から、夫婦が苦心して育て上げた今日迄の事、源吉と良太郎が眞の兄弟同樣に睦まじくしてゐる事などを涙で物語ります。而してお時との約束もあり此處で直ぐ手渡す譯には行きません。眞砂子はあの葛原家の一粒種だから、當然東京へ引取つてもよい、學問もさせ大學へも入れます、又永い間の物入の一部分として、二千圓を土産の印とします……、と利三郎はムラ〳〵として、人の情が金で買へると思ふのかと叩きつけますので、眞砂子と執事も驚いてそのまゝ歸ります。利三郎から遠足の洋服を買つて來ることを頼まれた村人多吉が歸つて來ます。夫婦が苦面した十兩の金で二人分は買へると思つてゐたのが、一着で八兩もするので、一着しか買つて來

ません。利三郎夫婦に困つたことになつたと、服を眞中にし考へてゐます、お光は源吉に因果をふくめて承知させ良太郎だけに着せてやらうと言ひます。其處へ子供等二人が歸つて來て洋服を見て喜びます。先に良太郎に着せますと源吉はどうしても承知しませんので利三郎はいきなり引倒します。斯うした悲劇の最中へ外の窓の處へ包みを持つた時子が、そつと忍び出て樣子をきゝ、窓から包みを投げ込みます、お光は表へ出て時子を見て急ぎ招じ入れ、此不思議な情景に利三郎夫婦は驚きます。時子は只伏し拜むばかりです、三人の息づまる樣な沈默が暫らく續きます。

第三幕　記念のために

利三郎の家の裏庭、お光はお時を連れて欅の前へ來て、一本の若木を指し、毎年良太郎の誕生日に、脊の高さを切りつけて來たと話します。時子は着物だけを貰つて、解きほどき、あの子の片身に身につけると言ひます。處へ紋附の羽織を着た利三郎と住持が來て、遲かれ早かれ先方の子供となるのだから致し方があるまい、良太郎へは、學校の先生に言ひ含めて貰ふ事にしたと言ひます。先生が來てみんなと記念の寫眞を撮りにかゝりますと、お時を始め利三郎夫婦が泣き出して寫眞が撮れません。

母三人

葛原家の客間。良太郎は學校の先生に連れられて來ます、其處へ清三郎と眞砂子が出て、良太郎を見て喜びますが、良太郎は此家の子になるのはいやだと言ひ張ります、清三郎は先生と良太郎を連れて緣側の方へ這入ります。暫らくして、お光と時子が這入つて來ます、母三人……お光は眞砂子の心事を疑ひ、張りつめた心の裡を色々と訴へます。眞砂子は只々其時の事を詫び入り、心の底から賴み入りますのでお光の心も和らぎます。眞砂子は、これからあの子の一生を三人がゝりで育てる氣だと言ふので、時子とお光は「お願ひします」といふ心持で、三人が互にすがりついて泣きます。

あだ待ち

葛原家の門前には、利三郎と源吉がしよんぼりと立つてゐます。暫らくして門の中から、先生を先に時子、お光が沈み乍ら出て來て互に顏を見合せ、若しや出て來はせぬかと利三郎の傘一つに、淋しい人々がみんなかたまつて雨をよけます。

大詰　鄕土の花

それからもう半年にもなります。清三郎夫婦は、今日も明治神宮へ散歩に連れて來て、まだいろ〳〵と良太郎の機嫌を取つてゐます處へ源吉が、村の學校の遠足で來て良太郎をみつけ、抱き合つて喜びます。其處へ先生が來ますので、良太郎はどうしても田舍へ歸ると言ひ出してきゝませんので清三郎と眞砂子は良太郎を思ひ切り只一言、お父さん、お母さんと言つて吳れと賴みます、遠足について來てゐた利三郎とお光が來合すので、清三郎は良太郎は矢つ張りあなた方の手に育つのが本當の幸福だと言ひます。やがて遠足を了り良太郎は生徒の列に加はつて進みます……時子がそつと出て一同の後を見送ります。

『眞景累ケ淵』に就いて

喜多村緑郎

今度私が大阪へ行くに就いて演す眞景累ケ淵は、云ふ迄もなく三遊亭圓朝の讀んだものゝ中でも、殊更巷間に傳はつてゐる方のもので、私もずつと久しい昔圓朝のを聞いた事があつた。併しその時の印象はもう大分薄れて來て、今では圓右の讀口だけが頭に殘つてゐる。委しい事は專門家に讓るとして、私の知つてる限りと、此累ケ淵が初めて上演されたのは震災三四年前二長町で、梅幸六代目松助と云つた音羽家一家で、豐志賀の執念の處だけを見せて呉れたのが初めだと思ふ。その時の竹柴金作の作も面白いと思つたが演技に就ても、個所々々大分感心させられた所があつた。その後私が大阪で暮す樣になつた時、何か怪談ものをと望まれて、私は直ぐ此累ケ淵を思ひ付いて早速臺本を取り寄せたり、何かしたが、遂に上演の運びにならず、その代り瀬戸君の「新四谷怪談」が初めて此時上演された。それが先達つて（と云つても一昨年の九月だが）本郷座で、今度は發端の宅悅殺しからお賤と新吉の捕物迄を通しで上演した。私はその時豐志賀とお賤を二役演つたが、これは木村錦花氏の脚色だつた。で今月大阪へ行くに就いて、私は豐志賀の件りだけを是非にと云はれてそれなら竹柴金作の方のによる事にしようと考へた。豐志賀の件りだけならその方がいろ〳〵の意味で（五六年前お藏になつた狂言を世に出す意味も含めて）私にとつて好もしかつただから豐志賀の役は今度で二度目とは云へ、私自身では始めて演る量見で、色々工夫して見る心算でゐる。話は飛ぶが去年の十月、音羽家が帝劇で又豐志賀を上演して（此時も好評たつたが）流石は怪談ものゝ宗家と云はれるだけあつて、梅幸さんの使つてゐる鬘を羨ましく思つた譯だが、今時の鬘屋にはとてもあれ丈の妙味は出來まいと思ふ。そう思ふと一寸くさ〳〵する次第だが、まア作だけ見ても決して損をした心持ちにならない事は私が受合ふ。何卒皆さんそのお心算で是非見に來て下さい。

光榮の文樂座

昭和六年嬋妍の春を彩つたわが鄉土藝術の文樂座は舊殼を脱した大衆的興行に異狀の好成績を擧げ若き日本に獨り古典の錦繡美を誇つてゐる。

四月八日。四ッ橋に復興した新裝文樂座が初の台覽公演に浴した。日本海員掖濟會總裁宮に在らせらるゝ、伏見海軍大將宮殿下には特別の思召により柴田大阪府知事並に松竹白井社長の御案内を嘉とせられ妃殿下御同列にて文樂座へお成り遊ばされた。當日は柴田知事、關市長をはじめ官民有力者三百餘名に御陪觀を差許され御機嫌いと麗はしく終演までいと御滿足げに拜された。松竹本社の白井社長、白井專務、文樂座を代表して福井常務等に特別の御拜謁を賜はり左の狂言を御覽遊ばされた。

義經千本櫻道行　初音の旅路より川連法眼館の段まで
菅原傳授手習鑑　松王首實驗の段
近頃河原の達引　堀川猿廻しの段

御前公演の榮に浴した出演者は

道　行（錣、大隅、新左衞門、道八、他）
川連館（駒、重造、古靱、清六、他）
寺子屋（津、友次郎）
堀川（土佐、吉兵衞、團六）

人形は榮三、文五郎等一同

引續き光榮に浴したは

四月十三日。

久邇宮大妃殿下、東伏見邦英伯、村雲尼公の御三方が御同列で台臨あらせられたことである。當日は本山大每社長の御案内で狂言は特別選定にて御台覽を仰いだ。御休憩中松竹白井社長侍立の上文五郎、榮三、紋十郎が拜謁を差許さ

れ、靜と忠信の人形について御下問に奉答した。當日の特別番組と主なる出演者は

日蓮聖人御法海
法論石より三昧堂
土　牢（大隅、道八）
龍の口（鍛、新左衛門）
三昧堂（津、友次郎）

義經千本櫻
道行初音の旅路より川連法眼館まで
道　行（南部、つばめ、吉彌廣助）
川連館（駒、重造、古靱、清六）

近頃河原の達引　堀川猿廻しの段
堀　川（土佐、吉兵衛、團六）
人形は榮三、文五郎他總出演

文樂座光榮の記念寫眞

（右）
伏見海軍大將宮殿下
同　妃　殿　下
柴田大阪府知事
白井松竹社長
其他陪觀の諸氏

（左）
村　雲　尼　公
東伏見邦英伯
久邇宮大妃殿下
人形の御説明を申上げる
白井松竹社長
忠信の人形を遣ふ
吉田榮三

歸つて來た筒井

鳥江銕也

——或るステージ。日本および亞細亞大陸の一部と太平洋を描いた地球が正面のバックに現はれてゐる。その地球が廻轉する。アメリカ、大西洋、イギリスおよびフランス、ドイツの歐洲續いて亞細亞大陸と、つひに元の位置に戻つて停止する。その間にネオンサインの赤いラインが走る。地球が割れる、中から、タキシードに赤毛布を羽織つた、すこぶるアナクロニズムな筒井德二郎が登場する。そして見物席に向つて「ヘイ只今歸つて參りました。」

×

これが、もし、今度彼氏の歸朝記念公演を演る場合の、第一景のプランださうである。まつたく、西洋の旅を歩いたとはいへ、彼氏はどこまでも赤毛布であり、大阪人であることに於て、すこしの變化も進歩も示してゐない。と自信してゐる。

だが、彼氏の服裝、持物、言葉はけだし私共の驚異である。スマートな洋服、スネークのステッキ、スイッツルの時計、ダンヒルの煙草ケース、それから會話の端に交る英語。これが、あの筒井にして……。

×

大毎（今は東日在社）の和田邦坊氏がかつて「邦坊漫畫の旅」を書いたことがある。それを道頓堀の劇場で劇化上演した時、大津の場に出る吃又が「奴さん」の一くさりを踊つた。その吃又は筒井がしてゐた。彼氏昔取つたきね柄——但しお茶屋の踊り場でした、チヨツト味をやるなと思はせたが、そのかくし藝が今度の歐米巡業の第一要素になつてゐた事を思ふと、全く恐れ入つてしまつた。あちらでの出し物「フオツ

クス・ダンス」「ベンケイ」ETC、ETC。

×

眼をうばうチエリーの釣り杖、銀色まばゆい谷川のながれ。幕があくともう美しい靜御前が出てゐる。枕の淨瑠璃は「ノウ、スロー」とデレクタアに否決されて、一切なし。すぐ狐忠信の出。一の谷合戰物語と片づけて、すぐに花四天の出、その花四天が全部女優で、チエリーの杖を持つてゐる。元祿模樣の小袖に赤襷、忠信をかこんで元祿花見おどりと漕ぎつける。おや、この幕は初音の鼓だつた筈だがと考へても追つつかない。もう世界は花やかな春のおどりだ。これが「フオックス・ダンス」のアウトライン。

×

一例がそれだ。だから、と云つた樣なわけで、とにかく日本歌舞伎のエキスを程よくアレンヂして、カクテルにして、外國人に一杯づゝ飲まして來たのが筒井いやミスター、トクジロ、ツツキである。嚴格な意味で、筒井の日本劇紹介には疑問があらう。しかし彼氏が紐育第一流のロキシー劇場やパリー及び羅馬その他歐米各國各地の大劇場に日本俳優のアクターとしての足跡をのこして來たことは記錄的だつたと云へる。それにチエッコスロバキア、ポーランドなどへも廻つて來たことは功績の一つに數へてやりたいと思ふ。

×

芝居の話より彼氏にエロの話を聞きたい――一夜、彼氏の歸朝を祝して私共幹事となり、歡迎の宴を張つた席上、そんなことを注文する者がある。「エロですかエロならわてらの得意の壇場だす」人を外らさない彼氏、巴里の銀貨をはさみからマッサージ、ポーランドリナイトクラブまで探檢して來たトピックを喋々と物語る。また愛すべき存在であることを示す。

×

話は前後するが、彼氏があちらへ渡つたのは一九三〇年の正月半ばだつたと記憶する。二九年の年末「來年は歐米へ渡ります」と彼氏から話を聞いた時「本當ですか」と反問した。まつたく、二度も三度もそれが本當ですか、いや、かう云つては失禮だが正氣かとまで云ひたかつた。が、それは事實、彼氏は私を捉へて「あつちへ行つて白い奴をパチツと××て來まンね」とエロティック、ダダを發揮してゐた。そして十六ケ月の長い旅路を終へて、この四月十六日にロシヤを通つて歸つて來た。そしての第一聲「鳥江ハン、黑んぼも××て來ましたぜ」は餘り公の場所では發表出來ない話題である。

×

もう一つ、こんどは彼氏の光榮錄。スエーデンの皇帝皇后兩陛下、ユーゴースラビアの皇后陛下、スペイン（革命前）の皇太子、スイスの大統領等、等、等、各國の貴顯名士に觀

てもらつた。世界的である！。

×

筒井は今後どうする？　劍劇へ行くか、レヴューへ行くか――彼氏の道は廣い。そしていくらもある。だが、彼氏はまた外國へ行きたいと云つてゐる。ドイツ劇壇に於いてはトクジロ、ツツキ一座の存在が認められ、いつでも、一座を引受けて開演させる劇場があると聞く。それに、巴里は彼氏一座の第二の故郷の如く、なつかしいと云つてゐる。巴里には彼氏の剧染のキヤバレーも出來た、彼氏にあらゆる便宜を計る商人もある。後援會もあるといふ話だ。

×

好漢筒井、建在なれ、彼氏は未だ四十九歳、五十歳から人生の道を踏み直すとしてもまだ前途洋々だ。――しかし、五十を越しては――でも、老後ます旺んな彼氏のことだから、仕事はこれからポツリ〳〵と始めるだらう。

大阪歸演を前に

曾我廼家　龜鶴

五月わ久し振りで浪花座へ歸れると云ふのでよろこんで居ります最も本年に成つてからでも度々そう云ふ噂が有りましたが、いつも間際で御流れに成つて、ぬかよろこびに終つたのですから今度も間際に變更では無いかと思つて居りましたが本極りと聞いてよろこんでゐる所へ、御社からの御手紙ですから本當によろこんで仕舞ました、無理も無いでせう、昨年の十月から七ケ月振りですもの。昨年は五月と十月と二回しか大阪へ歸れなかつたのですからネ、本年もどうやらそんな豫感がします。

此頃の私達は昔の奉公人の出替りと同じで一年に二度春と秋とにしか宿下りが出來ないのですから、大阪が戀しいのも當然だらうと思ひます、奉公先から歸つて大したお土産でも有れば宜しいが？兎に角久し振りに歸るのですから、せい〳〵可愛がつて下さい。

□　田村樂太

やあ之れはむつかしい御注文

來月は大阪浪花座出演とは豫期して居るところ、神戸にしろ、京都にしろ、名古屋にしろ、女軍ぜめに會つて御注文に應ずる事を忘れてしまつた、其の一節

話しは少し、さかのぼる、正月興業

神戸松竹劇場出演中、歳頃二十二三歳の美しい大丸番の粋人が三晩も四晩も續けて觀に來た、サア樂屋雀のうるさい事御茶子達のさゝやき、芝居がバレると須磨までのがれたが何時の間に知れたか京のお旦那の御耳へ入つた……名古屋から京都へ、さて此の京の芝居中、かんしの目のきつい事

實際色男には成り度くないと云ふ事をしみ〳〵味つた。

其の後しばらくは、きんしん中

浪花座に出れば京から御出張は目のあたり、大阪には妻子あり、

浪花座の出演　嬉しいやら悲しいやら、

何とか好い方法はないものかな？

半歳ぶりに行く浪花座

此の前の樣に大入祝ひを

おゝ、そうだ〳〵

道頓堀 豫約讀者募集

僅々三圓三十錢で面白い『道頓堀』が一ケ年讀める

皆様の御聲援と御支持とに依つて益々隆昌に赴きつゝある本誌は、昭和六年を期して茲に新なる飛躍をせんとしてをります。

就きましては、此際皆様の御愛顧を賜つて一層の發展を遂げたく本誌は大々的に豫約年極の愛讀者を募集することになりました。本誌を御支持下さる皆様は是非振つて御加入下さることを伏して御願ひ致します。

特に左記のやうな年極の讀者特典を設けてありますからなるべく小爲替の書留にて御拂込み下さいまし。

豫約者　一ケ年分――金三圓三十錢也
同　半ケ年分――金一圓六十五錢也（郵券代用一割增）

特典　豫約にはすべて送料が免除してあります。豫約讀者は本誌主催の凡ゆる會合催し物に無料若しくは割引を以つて出席することが出來ます。特別號も特に普通値段の割になつてをります。その他皆様の御滿足せられる幾多の企てが澤山あります。

本誌愛讀者は一人殘らず豫約者になつて下さい

オースチン・ストロング原作
長田秀雄譯

第七天國

四幕

京都南座上演

第一幕　巴里裏町の一部――街頭
第二幕　シコオの部屋
第三幕　塹壕地下室
第四幕　シコオの部屋

巴里裏町の一部――街頭

時日――一九一四年歐洲大戰の年、ある日の暮方、自動車運轉手ブール古びたタクシーのクランクを汗を拭きながら廻してゐる巡査が冷笑しながら通つて行く。

どぶ鼠のラットが布包を手にして酒場から出て來て、下水入口の鐵板を開け中へ入らうとする處へ、酒場の少女アーレットが追掛けて來て、酒を返せと騒ぐ、其處へブールが出て、仲へ入つて取做す。道路掃除人のゴビンが酒場から出て來た生醉のナナにぶつかるナナはブールにブローチの賣込を賴まれる。そこへ、休職陸軍將校のブリザックの秘書リーガンが來て、ブールが困りぬいてゐる自動車エロイスを何時までも放りつぱなしにしておくと規則違反になるなどゝ語る。アーレットも出て來る。ナナの妹のデイアンがナナに怒鳴られてゐる。そして、デイアンに先程のブローチを酒屋へ持つて行つて酒に代へて來いと云ふ。デイアンはそれを拒むのだが聽かれない。ナナとデイアンは喧嘩を始める。

暫て、休職陸軍將校のブリザックと辯護士のブロンドが二人の探偵を伴れて來る。ラッドが下水から顏を出す。ブリザックは、酒場を指して、こゝがナナとデイアンの姉妹がゐる處だと話す。辯護士ブロンドはデイアンとナナの伯父ジョージに姉妹の事を頼まれてゐるのです。ブリザックやリーガンはそれに盡力してゐるのです。

ブロンドは、ナナやデイアンがこんな場末にゐたのでは、カルウキン派のごくカチ〳〵の信者である伯父さんに對しても、困ることだらうと語る。

ナナが來たので、ブリザックは、何故お前達二人は伯父さん伯母さんの家から逃出したんだ。と聞くと、

ナナは、あの人達は大變貧乏で、あたし達をまるで下女のやうにこき使つてさ、その上に、一日に四度も教會に無理やりに行かしたりしてさ、そりや誰だつていやになつてしまふわ、しかし、さうして逃出したものゝ、女二人散々の苦しみにあつて、到頭また歸つて行つたんですよ、伯父さん伯母さんはその時、外國へ發つてしまつたあとなんですもの……と語る。

ブリザックは、伯父さんは、急に南洋へ渡ることになつてな、まあその土地で眞珠に成功されたんだ。と話す。

ブロンドも役目をはたして喜びましたが、酒飲みのナチも、明日から金殿玉樓に住まはれて、眞人間になれると思つて、いそ〳〵する。

……お巡りさん、お巡りさん、泥棒！　泥棒！　捕まへて、捕まへて……の聲、プールが酒場から出て來る。ラット鎭のついに金の大型の時計を持つて走つて逃て來る。そして素早くプールに手渡すプール、ラットをタクシーに押しこめ戸をしめて、時計をポケットにかくす。そして、一生懸命に自動車を拭いてゐる。巡査が神父セビオンと後を追つて來る。

神父は、巡査の前へ立塞がり、わしはあの男を縛らせたくない、と云ふ。巡査は、あいつは、あなたの時計を盜んだんぢやないですか、と責める。

神父は、實はわたしの狂言なんですよ。あれは鉛で拵へた玩具の時計なんです。と聞いたプールは落膽した表情で、酒場へ入る。神父は尙もブリザックに……わしは鉛の時計を餌にして掏摸や泥棒を見つけてゐるんです。見付け出したらわたしはな、親切に說いて聞かせて改心させてゐるんです。どうです。面白い狂言でせう。どらんなさいよ、この通り夜店でまとめて、格安で買つて來たのです。と云ふので、ブリザックは、自動車の中からラットを引張り出して神父の前へ連れて來るラットはシコオと一緒に下水で働いてゐる事を話しますと、神父はシコオは私の命の恩人だと話し、ラットを諭して放免してやる。

デイアンが驅けて來る。リーガンはデイアンを捕まへて、ブローチを取出してブリザックに渡し、こいつがこれを賣らうとしてゐた所を捕まへたんです。顏を上げろ！　デイアンは恐る〳〵ブリザックの顏を見る。

ブリザックは、デイアンを諭し、喜ばせて、伯父さんの事など話して、階段を上つて行く。

街頭に火が入つた。ナナとデイアンの伯父と伯母が來る。デイアンは出て見てゐたが、伯母さま！　と驅けよつたナナも降りて來た

伯父は、お前達は悪魔の囮まりだ！　この妖婦奴、我々の面汚しだと……怒る。

伯父は三百フランを酒樽の上に置くナナはディアンを伯母から引き離し、頸をしめて地上へ押し倒す。プール二度目の悲鳴をきいて酒場から飛び出し、……お、大變だ！　大變だ！　誰か來て助けてやれ！　と叫ぶ、下水の蓋が突然開いて、シコオが姿を出す。そして、ナナを下水の穴につり下げて、あやまらせる。ラットは下水から出て、タクシーに行き小さな包を取る。みんなはこれから食事を初める。シコオはディアンにパンをすゝめる。ゴビンも來る。みんなの間では、無神論の議論が初まる。神父も來る。神父はシコオの神への數々の顧ひの中の一つ、下水人夫から道路掃除人になるためのカードと、お寺のおまもりを渡してやる。シコオは俺は出世したこれから俺は道路掃除人だと喜ぶ。三人は酒場へ行きかたけが、シコオはディアンがナイフで自殺しようとしてゐるので取上げる。ディアンは伯父に勘當されたことを悲觀しますが、シコオは慰めてやります。巡査が六七名の女を珠數つなぎにして通る。その中にはナナも混つてゐる。巡査はディアンも引立てやうとしますが、シコオは、二人の間へ入つて、待つてくれ、ジャッキさん、この娘をしばつちや駄目です。この娘は正直な女です。と言譯しますが、巡査は尚も引立てやうとするので、これは、わしの女房です、と頑張る。どうかこうかこの場はのがれる事が出來たが、シコオは良心の懺みに悶える。ディアンは慰める。事件落着までディアンはシコオの家に居る事になる。シコオとディアンは、腕組みしてプールのエロイス自動車に乘つて、わたしの家内、シコオ夫人を改めて御紹介します。これから新婚旅行としやれ込んで、まづ第一がプラスカンコードから初めて、シャンゼリーゼを通つて……今晩はフランスで一番の金持なんだ。シコオ、タクシーに乘つて扉をしめる。エロイス勇ましく走り出し二人尻餅をつく。アーレット店先で見送る。

シコオの部屋―　第七天國―時日三日經過、ディアンはアーレットとゴビンの妻のイヴンが子供が生れるのでスープをこさへながら第七天國に來るまでの話をしてゐます。ゴビンも來ます。ディアンも此頃ではシコオの眞からの親切にほだされて、他と泊つて食事だけするシコオの來るのを待ち兼ねてゐます。プールも來ました。シコオも大きな箱を抱へて、白ばらの花を耳にはさんで來る。プールと十時と云ふ約束でしたが、シコオは役所へ行つて戸籍がないので大分言ひ合つて遲くなつたらしいのです。シコオとディアンは結婚することになりました。シコオ―ディアン―天國これが二人の愛の言葉でした。シコオは、こんな天國に住んでゐると、つひえらい氣になるもんだ、星なんかつひそこぢやないか、いゝ香だな。うまさうなスープだとはしやぎます。ゴビンがスープを取りに來にので、ディアンが行つてやります。地上を眺めると、三々伍々歐洲大戰の火ぶたはまさに切られんとしてゐます。ゴビンもシコオも北部聯隊所屬として出征しなければならないのです。シコオが一人ゐると、ディアンの伯母さんが來て、シコオにディアンと別れてくれと云ふのです。ブリザックも來て賴むのです。シコオは自分一人では決し兼ねるので、ディアンを呼びます。しかし、伯母さんが金で解決しようとするので、斷然斷つて了ひますゴビンは手に荷物をかゝへ出征の支度をして來る。シコオはディアンと結婚式をあげる。

嘸てシコオ出征の時が來た。

恰度十一時、この時間に俺は必ず毎日お前の心の中に歸つて來ると暮ふナナも來た。

斬壕地下室　千九百十八年十月六日の午前十一時前後、ラットがミラボウ中尉の從卒をしてゐる。ジャンはアンドレー中尉の從卒をしてゐます。兵卒のアンリも來て、敵の總攻擊に不安を感じてゐます。

ジャンが鷄の丸燒を作つたのをラットに盜まれてしかられます。ゲラン中佐を見えます。中佐は敵の總攻擊前に巴里東部聯隊と連絡をとるために、シコオを派遣する事に命令します。

段々敵の總攻擊は猛烈になつて來る。赤十字救護班の服裝で神父も見える。ラットがやられて、神父に後事を托する。嘸て使命をはたしたシコオが血だらけになつて歸つて來る。ゲラン中佐殿を呼んでくれと云つたまゝ倒れる。神父セビオンとジャンが介抱する。どうだ。シコオ　中佐殿は、今すぐ見える。もう　少しの我慢だ。シコオは烈しく呻吟する。……デイアン、デイアン　俺は死んでしまふかも知れない。眼をやられたんだ。だがデイアン、俺は死んでも魂はきつと、お前の處に歸つて行くよ。……十一時になると……神父さん、これをデイアンに渡して下さい……と寫眞と紙入れとお守りを出す……神父さんどうぞデイアンに傳へて下さい。シコオはデイアンの事を思ひながら死んだ。シコオはやつぱり豪い人間なんだと……そこへゲラン中佐が駈けつけて來た。そしてシコオの差し出す紙片を取つて見て、東部聯露の聯隊長の通報を開き、……あゝこれで聯絡がとれた——シコオお前のお陰で、我軍は敵の包圍からのがれる事が出來たぞ、と云はれて、シコオは、そりや本當かねと微笑み、

やつぱり俺は豪い人間なんだ……と昏睡する。

シコオの部屋——「第七天國」——時日千九百十八年十一月十一日四年以前よりも物凄く古びてゐるアーレットが皿を洗つてゐる。ゴビンの妻のイヴンが四歳になるマリーを連れて來る。アーレットはブリザックがデイアンに色々のものを買つてやつたり、職場の事で好意を見せてゐると云ふ話をするゴビンは腕が片方なくなつてゐるデイアンは馘首になつて歸つて來る。ブリザックが酒に醉つて來るブリザックはアーレットに、此頃チイアンが好きで好きでならないと話し、今日はデイアンの伯父さんが、デイアンに財產を全部殘して逝つたので、いゝ話を持つて來たのだと語る。リーガンが來るリーガンは、神父の言傳によつてシコオが戰死した報知をもつて來たブリザックはリーガンにその遺命をもつて來るやうに命ずる。デイアンが來る。ブリザックはデイアンに友達になつてくれと云ふ。處へ、イヴン、アーレット　プール　ゴビンが入つて來る。プールはエロス自動車の話をする。神父セビオンは、デイアンに御氣の毒ですとシコオの事を告げに來た。そして遺品をうけとつた。

街から街には休戰と平和の鐘が鳴りわたつた。プール　ブリザックは踊り出す。デイアンも思はずブリザックの抱擁に擁せられやうとしたとき、失明のシコオが、デイアン　デイアンと絕叫しながら駈けよつて來た。赤十字の腕章をつけた看護卒がついてゐる。

デイアンはシコオの膝を抱きしめて泣く。

こゝはやつぱり俺達二人の天國だ。

いま眼こそ見えないが、やつぱり俺はとてもえらい人間なんだ。

——第七天國——

蒲田特作

街の浮浪者

原作　下村千秋・脚色　野田高梧・監督　池田義信・影撮　濱村康義

浮浪者がボロ屑のやうに押し込まれてゐる安宿――それは千住の浪人館である。新子の家は其處にあつた彼女は上野附近で花賣りをしてゐた、見た處十八位に見へるが、たしか二十を三つ四つ越してゐる筈だ。

新子はこゝ數日家に歸らなかつた、げから弟の芳公を感化院の女が連れに來た事も、父親が自動車に轢かれた事も知らなかつた。

或る晩、池の端の親方と云はれてゐる男が新子の側へ來て、甘言を以て彼女を弄絡しやうとした、男の腸の中を見ぬいた新子は「あたし一人でやつてみるわ」と意外な返事が先づ男を驚かし、そんな事をするのに間に入つた者に少しでも搾られるのは馬鹿らしいと傳法に云つた。男は流石に凄味をおび顏色を見もてやれるならやつてみろ、東京中には俺の眼が光つてゐるのだと捨臺詞を殘して去つた。

その夜浪人館の附近で新子は未知の若い男と知つた浮浪の卵らしい男、彼女は男を好きになつた、しかし男の口から洩れた言葉は彼女の胸に餘りにも强い動悸をあたへた「運轉手の奴、自分のへまで人を轢き殺しておきながら僕に責任を着せておん出しやがつたのな」男は助手だつた、そして轢かれたのは新子の父親だつた。

弟のやうな男――名は青木勘十郎と云つた、彼と協同事業をしやうと思つた新子も、父を轢かれたと知るや、流石に涙がしじみ出た、けれど勝氣な彼女は强いて我慢した、涙を隱す微苦笑の心中を青木は解らなかつた。

今は哀しい位牌となつた父親のために、家の附近は

さわ〳〵と蠢いてゐた悲慘に、皮肉に、どん底へ〳〵と引きづり落されゆく今の彼女には涙も出なかつた。彼女は僅かの金包みを位牌の前に置いた。弟芳公は二三日前に荒川の浮浪仲間に入つたさうだ。父は死んだ、殘された母は繼母だつた。もう家へなんぞ歸るまい」彼女は獨語した——

壽司などを手みやげに新子は南陽**ホテル**の一室に待つてゐる青木の處へ歸つて來た、しかし青木は喜びの色も見せず却つて冷たい口調で彼女と別れたいと云つた。青木をいとしいと思ふ餘り之れのみは云ふまいと思つた自動車事件の奇しき二人の關係も、今は洗ひざらひ語つてしまつた、青木は呆然と聞いてゐるのみだつた。

孤獨の彼女、それが青木を得たゝめにせめても滿たされてゐたのに、今青木に離れられたら彼女は何をするのであらう。自制し得ぬ自暴自棄の出るが彼女には怖しかつた。

「わかつた、僕はもう出てゆきやしないよ」青木の言葉に彼女の面にも寂しい喜びの色が浮んでゐる。

新宿の追分あたり新子は例の通り花を賣つてゐた、少し離れて青木が佇んでゐた鳥打帽の男が來て鋭く睨みつけて四圍に氣を配りながら「うか〳〵してやがると生かしちやをかねへぞ」と脅かされたので二人は人形町あたりへと圓タクを飛ばした、不安氣な青木を見て新子は「お金はあるうちに使ふものよ」と言つた。

しかし人形町にも池の端の眼は光つてゐた

雨の幾日かゞ續いた、新子達は一度の食事代にも窮した。簡易宿泊所へ行くために新子は青木のレインコートを借りて男裝した。一泊九錢、無錢の彼等にはこの宿泊料さへ話の折合もつかにず去つてゆく。今は乞食以下の生活に陷ちてゐた——

キャブも滿員だつた、そゞろ歩く青木には虫の音が哀しく聞かれた、彼女は故郷の靜岡が戀しくなつた、新子も涙ぐんでゐた。ふと彼等は唄ひながら歩いて來る男に會つた、ジンタと呼ばれる忘活な男を友に得て三人は當途なく歩いてゆく。

米倉座の裏手で死んだ浮浪者があつた、有り餘る米、それを食へず死ぬ浮浪者、こゝにも人生があつた。

浮浪者の寢場所を銀行が買つて鐵材置場にした、人間を追つて鐵を寢かす三人は再び當途なく歩いた。

勞働ブローカーと會つた、彼はジンタから勞働手帳を五圓で買つてやつた。ジンタと青木とが國へ歸ると聞き、錢別に御馳走してやらうと、男は三人を自動車は乘せた。京濱國道を車は飛ぶやうに横濱へ——、奸惡なブローカーは途中で青木とジンタとを降し、新子のみを乘せて暗を衝いたやがて横濱の片隅、怪しげな南京料理店へ新子は賣られた。彼女には淫卑な生活がつゞいた。ジンタと青木とは裏切られた憤怒からブローカーを探し、漸く新子の居る所を發見した、そして彼女を救ふ事が出來た。

「僕は今自分でも不思議なほどの力に迫ひ立てられるんだ！僕達はもう只のルソペンぢやないんだ……僕達ば腕を組んで戰ふんだ！」

黎明の道ゆく新子等三人には今までに見られぬ颯爽さが見られた——

（朝日座近日封切）

配役

海老原新子	栗島すみ子
父親	野寺正一
母親	飯田蝶子
新子の弟芳公	突貫小僧
ルンペン	水島亮太郎
同	阪本武
同	關時男
青木勘十郎	月田一郎
ジンタと呼ばれる男	渡邊篤
新宿の男	横尾泥海男
人形町の男	小林十九二
勞働ブローカー	押本映治
勞働者	吉谷久雄
南京料理屋主人	山本冬郷
その妻	青山萬里子
支那商人	宮島健一
感化院の女	谷崎龍子
巡査	仲英之助
池の端の親	藤野秀夫

松竹キネマ京都撮影所作品

振袖源太

文藝春秋 オール讀物號所載

原作 野村胡堂・監督 廣瀬五郎

【梗概】江戸開府以來最初の輕業で評判をとつた振袖源太は、前髪立の美貌と鮮やかな藝當で江戸ッ子の人氣を集めてゐた、御用聞きの平次は或る日兩國橋上で老爺の投身を助けた事から、以外なる怪事件を知る。十日目毎に起る人さらひ——江戸呉服問屋「福屋善兵衛」の子五人兄妹のうち、三人までが、行方不明となつた事である。この怪事件探知の一役をかつたのは言ふまでもなく平次である先づ第一番に目を付けられたのは後妻お龍である。續いて殘るお糸の不明！愈寮の中は戰慄と恐怖に包まれ鼎の渦卷く騒ぎです。同じ御用仲間の利助は、平次との張合から一泡ふかす心算ですお瀧と博賭半三郎に目星をつけた彼は逸早く彼等を捕へる。だが平次がねらつた者——女中お千代と源太こそ五人誘拐の當人であつた。而し以外の事實、振袖源太は福屋善兵衛の爲めに沒落した本家福屋の忘れ遺兒であり、お千代こそは彼の女房であつたのである。

福屋善兵衛	關　操	乾　分　金兵衛	大浦清三郎
その娘　お　糸	山田あけみ	同　　松　吉	冬木京三
キ その弟　樂三郎	若松秀雄	振　袖　源　太	實川正三郎
ヤ 長　兄　榮太郎	未　　定	女　中　お千代	河上君榮
次　兄　榮次郎	未　　定	後　妻　お　瀧	環　歌子
ス 長　女　お　清	綾路恭子	博　賭　半三郎	永井柳太郎
ト 御用聞錢形平次	堀　正夫	與力笠井新三郎	日下部龍馬
一 乾　分　與　吉	廣田　昂	老　爺　喜　助	宇野伊之助
御用聞石厚利吉	高松錦之助		

能率百パーセントで
「振袖源太」完成
十日間のスピード撮影

新入社の實川正三郎第一回主演、文藝春秋「オール讀物號」所載、野村胡堂原作「振袖源太」は、下加茂近來の探偵映畫として廣瀨五郎監督のもとに鋭意製作中のところ、十日間といふ超スピード撮影で、この程完成した。

同映畫は、兩國江戸で、捕物の名人「錢形」と異名をとつた平次の捕物奇談で、之に美男輕業師を廻つて展開される奇々怪々の怪事件を描いたものである。

正三郎は輕業師で、堀正夫は錢形平次で夫々活躍、各所に獵奇趣味を横溢せしめてゐる。猶、既報女中お千代の千早晶子は河上君榮が變更力演してゐる。

規定

皆様のための解放欄です。振つて御投稿下さい。用紙はハガキ字體は明瞭に廿字詰のこと。

讀者からの讀者へ

◇二月の菊之助以來美しいお姿も見られず、本當に淋しい春で御座いましたけど、五月には東京から伯父様がお見えになる由、東様も御一緒だらうと樂しんで居ります。「道頓堀」四月號を拜見して先月にも增して松島家黨の多い事を何より嬉しく思ひました。いつかは松島屋づくしで……ね、皆様どうぞよろしく晩春に麗しき御姿に接しることの出來るのを樂しんでをります。東様何よりもおからだをおいとい下さいませ。それから曾根崎の梅香様何卒本姓をお明し下さいまし。（島の內　むらさき）

◇十三の千鳥様私はほんたうに好いお姉様が出來て嬉しうございます、これから永久に御交際下さいませ。大好きな辻野様は又病氣が再發したのですつて……そして待ちかねか五月も休演だそうでございます、姉様もかげながら神かけてお祈り下さいませ、そしてあの美しいお姿を一日も早くステーヂの上に拜見いたしたいものです。姉様まことに御面倒な事を申しますが、姉様の住處姓名とそれからもし御存じでしたら辻野様の御住處を來月の本欄でおしらせ下さいませ（堀江　北野亮子）

◇風薰る五月、南座にも淸新なる舞臺を見ることができます、雪洲、及川、それに關西初演の尾上菊枝、久しく振はざりし京都劇壇のため大いに力强く感じます。京都在往の道頓堀愛讀者よ大いに頑張りましよう、皆様誌上で御交際をお願いします。（京都市中京區、釜座通り押小路下る　坂本生）

◇記者様初投書でございますお見すてなくね私大の關西歌舞伎黨でございますの、中でも高砂家が大好きですの、先月も神戸まで參りましたのよ、あの御上品な春日局のしとやかな藝風、小稻の美しき御顏、ほんとに何時見てもほれぼれいたしますわ、四月又巡業だそうで悲觀いたしましたわ、五月には是非大阪へ歸つて下さる様にお願い致します。福助黨の皆様松島家黨のそれの様にふるつて御投書あそばせな。（京都　高砂福子）

◇喫煙室の諸者諸君よ——美しい女形、京成駒家（中村扇雀丈）の藝に對する後援者は御座いませんか、ありましたら來月號よりの喫煙室でお話いたしませう。ついでに見たまゝ批評もいたしませう。（堀江　扇）

◇私も大の新國劇黨なんですの大いに〳〵讃成致します我が新國劇黨のためにおはたらき下さい是非後援會を組織いたしませう、私も一番に加入致します、川口様早速と組織して下さい、私の一番すきな新國劇のために他の皆様もおふるい下さい。（上町　露香）

◇島の內松子様へ——私も大の松島家黨ですの何卒誌上で御交際下さいまし（堀江　松子）

◇曾根崎梅香様——私も貴孃と同じ様に松島家黨の一人です、是非オン・パレードの中へお加へ下さい。（六甲　蝶子）

◇北濱勝美様へ——僕も飛鳥明子の舞臺にはいつも敬服をしてゐるのです。努力の人飛鳥明子孃よ！　彌よ多幸であられんことを。（船場　明朗）

◇芦屋はね子様——隨分大變なのぼせ方ですね、おほゝゝあたしおかしくて〳〵笑ひが止らないね、さあ是非指を切つて見せて貰ひませう。皆様如何です。（長瀨　淸子）

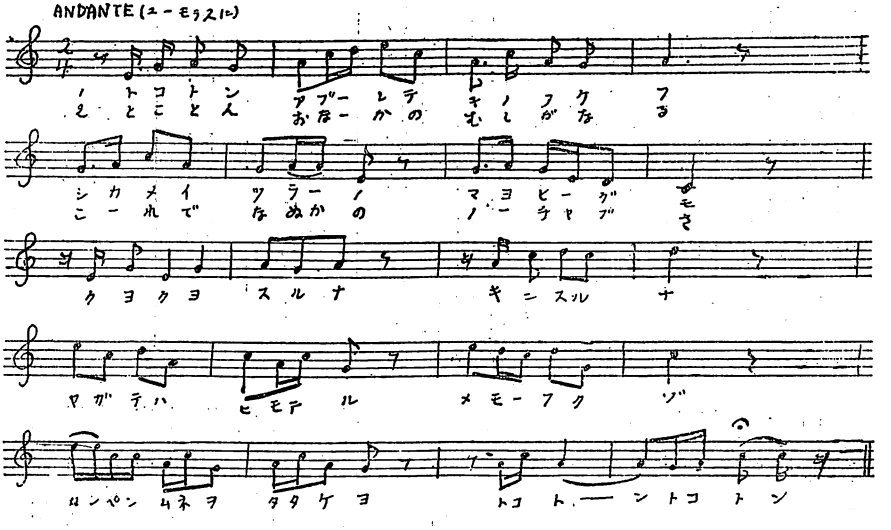
◇道頓堀四月號喫煙室欄內に川口様の緊急動議としれ新國劇後援會組織の御勸誘がありましたか私は新國劇が大好きです澤田先生御在世中より今日に致るも當地開演地は必ず觀劇いたます大賛成ですから後援會御催の際は加入さして下さい。（住吉　矢野生）

◇五月の浪花座には久しぶりで淡海劇が歸演するのですつて、妾あの淡海劇が大好きなんです。淡海黨の皆様何卒本欄でおつき合ひ下さい。（濱寺　里井）

◇道頓堀のくれない様へ——ほゝ四月號本欄

街のルンペンの唄

（朗らかなルンペン）
サトウハチロー作詞・高階哲夫作曲



1

トコトンあぶれて
しかめつ面の
——くよ〳〵するな
やがて陽も照る
ルンペン胸をたゝけよ
トコトン〳〵——

昨日今日
まよひ雲
氣にするな
芽もふくぞ

2

トコトンおなかの
これで七日の
——くよ〳〵するな
やがて陽も照る
ルンペン胸をたゝけよ
トコトン〳〵——

虫が鳴る
ノーチャブさ
氣にするな
芽もふくぞ

3

トコトンなみだも
なんにもかにも
——くよ〳〵するな
やがて陽も照る
ルンペン胸をたゝけよ
トコトン〳〵——

もう出ない
からつぽさ
氣にするな
芽もふくぞ

4

トココンこゝろを
力をあはせろ
——くよ〳〵するな
やがて陽も照る
ルンペン胸をたゝけよ
トコトン〳〵——

さらけだし
タワリシチ
氣にするな
芽もふくぞ

松竹レコード吹込番號第八號
（週報第二百五十一號参照）

たしかに拜見いたしました。あなた隨分律氣な方ね、そして古風な……あなたはアプ・トゥ・デートのモダン・ガールぢやないことよ、モガでなくして映畫を語る資格なし。私とあなたの喧嘩はあなたの自己暴露によつて、遂に完全にあなたの負けになつた譯ですね、本欄の皆樣御同感下さるでしよう。（神戸　春子）

◇僕大の朝日座ファンなんです。本欄の諸兄姉……朝日座黨の方は何分の御交際を願ひます。我等の唯一無二の蒲田、下加茂映畫を聲援いたしませう。（高麗橋村上生）

◇新國劇黨の皆樣御健在ですか、新國劇は今月の東京新歌舞伎ですね、妾淋しくて〳〵堪らないのよ、新國劇の皆樣はいつになつたら大阪へお歸りになるのでせう。御存じの方がありましたら私を助けると思つて是非來月の本欄でお知らせ下さい。その代りお禮をどつさりいたしますから。（堂ケ芝　華香）

◇私昨日南座に開演中の早川雪洲を見にゆきましたの、あゝ私すつかりチャームされちやつたわ、「第七天國」のシコー何と素晴しい演技でせう、尾上菊江樣の可憐な藝風と共にセッシュウ・ハワカワの名は永久に忘れられない印象になりました。早川黨の皆樣、何卒よろしくお願ひをいたします。（京都　洛西陽子）

劇壇往來

東西合同大歌舞伎

——中　座——

一日　初日
每日午後二時開幕

【狂言】一番目「新淋雪物語」四幕、中幕山紫紅作大森痴雪舞臺監督「平清盛」一幕二番目「伊賀越道中双六」沼津の里・大喜利食滿南北作鶴澤友太郎作曲上の卷「杜若戀在原」竹本連中・下の卷「神樂諷雲井曲毬」常磐津連中

【役割】葛城民部之丞、吳服屋重兵衛(鴈治郎)妻梅の方、八ッ橋、丸一榮太夫(魁車)園部左衛門、笛吹蝶之助(長三郎)侍女籠、筑後守家貞(吉三郎)松浦太郎高俊、福德屋萬次郎(政治郎)郎黨藤五(駒之助)三位中將重衡、大鼓持梅作(成太郎)來國行、組頭藤左衛門主、馬判官盛國(大吉)肥後守貞能(八百藏)使僧覇坊、五人組喜左衛門(鴈正)住職阿奢梨、郎黨彌三郎(九團次)澁川藤馬(箱登羅)五郎兵衛正宗(市藏)幸崎伊賀守、平相國入道清盛(中車)刀鍛冶團九郎、園部兵衛左衛門入道西光(延若)薄雪姫、鶴の前、白酒賣好松(扇雀)仲居お秀(延太郎)秋月大膳多田藏人行綱、池添孫八(壽三郎)娘お れん、佛御前、藝者おたか(松蓮)奴妻平、荷持安兵衛、大工千代吉(我當)妻萩の方、下男吉助實は來國俊娘お米、太神樂どん八(宗十郎)刎川兵藏、雲介平作(仁左衛門)

志賀廼家淡海劇お目見得

——浪花座——

一日　初日
晝十二時
夜五時半二回開演

【狂言】第一夕刊大阪新聞主催祭に因む惠川重作「船場のぼん〳〵」三場・第二山本肇作「穴」一幕・第三近江甌念作「愛の傷み」一幕・第四惠川重作「兵際ローマンス」一幕

【配役】

女房おつね、香頭庄造(龜鶴)伜千太郎、親友阪本(辨慶)野晒吾助、父豐造、百姓源助、伜三造(樂太)豐太閤、父要吉、校長清水(白石)蓮如上人、竹内少尉(歸帆)女給蘭子、姉芳子、娘お絹(登喜次)女給夢子、妻とも子、妹光子(里路)松平忠明、騎手小山(辨天)奴の小萬、源助娘お辰(かもめ)弟久二郎、下男文藏、老人平尾(源五郎)紙賣村田親友津村、伍長勝山(十太郎)紙問屋西井、壽しや清吉(太郎)會社員飯田、酒造家北川、伜新一(淡海)

河合喜多村顔合せ興行

——角　座——

二日　初日
晝正午
夜五時半二部開演

【狂言】(晝の部)　第一川村花菱作並監督「母三人」四幕八場繁岡驟裝置・第二初代三遊亭圓朝口演竹柴金作脚色「眞景累ヶ淵」二幕(夜の部)　第一菊池寛原作・報知新聞連載中井泰孝脚色山上貞一監督「有憂華」四幕十場・森寛次郎大塚克三舞臺裝置・第二伊原青々園作眞山青果脚色「假名屋小梅」三幕

【配役】女房お光、女將お清、假名屋小梅（河合）先生、翁屋さん蝶、藤野秀作、銀之助（都築）舞臺裝置家杉野、手代清兵衞、藝妓喜代美（高田）多市、アパートの主婦、おかみ（若井）教師石山（成川）良太郎、辻占賣（伏見）葛原清三郎、小串信一郎、深見の伴新吉、會社員濱本（藤村）源吉（沼田）執事、富平、老車夫（山中）住持、與右衞門、執事太田、父千吉（木下錄）伊藤春海、安富時雄、七太郎（元安）利三郎、煙草屋勘藏、安富愼藏、箱屋兼吉（大矢）妻眞砂子、女房おつねおかね（木下吉）娘お久、藤野光枝東女中、林田夫人、藝者（夏目）下女、安富香代子、藝者（浪花）看護婦、マルタン夫人の女優、女中おつね（雄島）時子、安富綾子、藝妓蝶次（石河）師匠豐志賀、宇治一重（喜多村）

文樂座人形淨瑠璃

一日初日

毎日午後三時開幕

【狂言】前「菅原傳授手習鑑」加茂堤より寺子屋まで・切「戀飛脚大和往來」新口村の段

【太夫三味線割】前、加茂堤の段櫻丸（和泉）八重（町）清貫（長尾）松王丸（文）梅王丸（長子）時世の君（播路）苅屋姫（龜久）糸（國六、芳之助）杖折檻のだん（つばめ、糸八叶仙糸）東天紅の段、（大隅、道八）相丞名殘の段、切（古靱、清六）車先のだん、（富、友作、友二、吉左）車場のだん、松王丸（相生島）梅王丸（南部）櫻丸（源路）時平（鏡）虎丸（辰、千駒、陸路）糸（吉彌、廣助）茶筌酒のだん、（駒、重造）喧嘩の段、（和泉、相生、島）糸（綱右衞門、猿太郎、友衞門、清二郎）櫻丸切腹のだん切（土佐、吉兵衞）寺入りの段（文宇、勝平）松王首實檢の段切（津、友次郎）

【人形割】伯母覺壽、千代（文五郎）武部源藏、孫右衞門（玉次郎）土師兵衞、置頭布（門造）苅屋姫、鶴掛藤兵衞（絞太郎）忠三女房百姓十作（光之助）時世君（文之助）傳がばし（覺三郎）涎れくり（玉德）白太夫（小兵吉）輝國、妻戸浪（政龜）御臺所、針立道庵（玉七）菅秀才（紋司）杉王丸、小頭（市松）八重忠兵衞（扇太郎）梅王丸、宿根太郎（玉松）松王丸、菅相丞（榮三）櫻丸、はる、梅川（紋十郎）

東京新劇大合同

——南座——

一日初日

毎日午後四時開演

【狂言】菊池寬作報知新聞連載北村小松脚色園池公功舞臺監督「有憂華」四幕九場河野鷹思舞臺裝置・上「驚娘」下「羽根の禿」長唄囃子連中・オースチンストロング原作長田秀雄譯並舞臺監督「第七天國」井上弘範舞臺裝置

【配役】シコオ（雪洲）藤野秀作（梅島）綾子の兄時雄、ゴビン（伊志井）神父セビオン（大東）安富愼藏（菊波）新聞記者A、從卒ジャン（花和）新聞記者B、ミラボー中尉（渡邊）座員C（川島）座員D（藤園）座員（藤井）座員A辯護士プロウド（本郷）伯父ジョージ（藤田）どぶ鼠ラット（村田）川瀨英吉、休職大佐プリザック（柳）小串信太郎、老運轉手ブール（小堀）驚娘、禿たより、ナナの妹ディアン（尾上）女中さだ、不良な女ナナ（藤間）時雄の新妻香代子酒場の少女アーレット（村田）ゴビンの妻イヴン（小村）伯母バランテン（米津）秀作の妹光枝（及川）安富綾子（川田）

編輯後記

五月の道頓堀は、先づ中座東西合同大歌舞伎の鴈仁を始め錚々たる大名題揃ひの大一座に、角座の大新派劇河合、喜多村の顔合せ興行、浪花座は半歳振り歸演の淡海劇等、演劇シーズンの華五月――と劇場街のキャッチフレーズに書き立てられること程左様に、今月の道頓堀の繁華さです。

×

觀劇と宴會の合理的融合として食事付觀劇券が道頓堀の劇場に發賣されるやうになつたのも、種々な意味に於て今月の一記錄でせう。

×

中座の一番目「新薄雪物語」は三十年振り上場といふ珍らしいもの。また二番目「伊賀越道中双六」沼津の里は、鴈仁握手劇とし記錄に殘る大正十二年以來實に九年振りの國寶的大舞臺。この「沼津」の思ひ出に就ては高安吸江先生に、「新薄雪」に就ては高原、森、高谷、倉田の諸先生に、特に乞ふて御執筆を煩はしました。切に好劇家諸兄姉の御熟讀を希望いたします。

×

その他俳優諸家の玉稿を始め、例によつて好讀物滿載。

×

「歸つて來た筒井」で本號に鳥江氏が紹介しました筒井德二郎君のエロ、グロ、ナンセンスの歐米見聞記と、在ベルリンの學究某氏から特に松竹白井社長に寄せられた眞摯なベルリン劇界見聞記が共に愈よ次號から特別讀物として本誌に連載、更に誌上を飾ることになりましたれば、躍進又躍進の本誌を此上共に御愛讀下さるやう、本誌愛讀の諸兄姉に、此際特にお希いしてをきます。

×

終りに御多忙中態々本號のために御執筆下さいました諸先生に厚く御禮申上げます。（大橋）

昭和六年五月一日發行
雜誌『道頓堀』第六年第五十六輯

◇誌代は前金でお拂ひを願ひます。
◇郵券代用は一割增にて御註文を願ひます。
◇御相談の上廣告掲載の需めに應じます。

廣告取扱所
大阪電報通信社
大阪市北區中之島二丁目
廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越し下さい

特價 金參拾錢（郵稅壹錢五厘）

昭和六年四月三十日 印刷
昭和六年五月一日 發行
大阪市南區久左衛門町八番地
松竹土地建物興業株式會社
編輯兼發行者 鳥江銕也
大阪市東成區鶴橋南之町一丁目
印刷者 北島竹次郎
大阪市東成區鶴橋南之町一丁目
印刷所 桃谷印刷株式會社

大阪市南區久左衛門町八番地
發行所 松竹土地建物興業株式會社 道頓堀編輯部
電南（二二四〇番）（六六六五番）

新緑を謳ふ

ちか〳〵光る陽ざしに五月はもう新鮮な緑です。輕快なお召物、淡色の服飾から受けるあの初夏の感觸こそ、全く吾等が求める何ともエキスの云へぬ感覺です、そして若しそこに洗練されたデリカシーを示した三越の新流行が加へられるならば、さらに現代人としてより潑剌たる初夏を享樂されるでせう。

三越
◆大阪◆

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和六年四月三十日印刷
昭和六年五月一日發行

「道頓堀」第五十六輯　第六年五月號

一部金參拾錢

清く氣高く美しい

クラブ白粉

上品な白色美しい肌色
清新な水色明るい桃色
純良無鉛のクラブ白粉

クラブ香油